



東海道集

下





此書何より入るべき  
 子迎少也。一列も  
 可き事始むるなり



玉泉主人



下巻目録



紫湯玉や	本の下り
梅香り	八九回
豆乃	友のあや
秋立ち	仰明け
ふり賣の	精甚
いささ	新麦ハ
惟子ハ	十三夜
あ仙ハ	音より
雪のね	そのか
提子	川お
野ハ	風流の
藤のあ	五人技
胡弓や	管根
夕や	傘
芹焼や	早く
水鏡	其
卯草	折

160



牛依り  
若くし  
程草や  
十六番ハ  
世々々々  
河生々々

しらくど  
秋らくど  
牛依り  
やんや  
はら  
志々々の

右分仙

ぬきて切  
水々々  
旅人々  
旅病々  
若弱々  
江戸橋  
野あ  
本枯  
文月や  
砂暑々

右五十首  
右十二句  
生々々  
名月や  
名月や  
みなお  
月々々  
星今  
砂ら

空々々  
世々々  
秋のおと

水高や  
白髪ぬく

右半分仙

あろ  
松破  
焼飯  
金炭  
能家  
你門  
清々  
茶標  
芽出  
手々  
世々  
さ々

あろ  
松破  
焼飯  
金炭  
能家  
你門  
清々  
茶標  
芽出  
手々  
世々  
さ々

右表斗

是より

才三すくの部 三十

昭の部 三十六

附向斗の部 三十七

紫陽花や菖を小庵の別室後

ふき雨あひは 伴方茶儀

朝日は朝の子賣の夢みせて

少々落のお手掛日記く

かんくと有内室のまをりく

楳嶺うまきくまも又茶家

信長と信長とくぬ破まら

きくくと鳴る深淵乃る

あきま羽織脱をり後控

ちいさな鳥乃力言えよま

商をゆくりと内の細り

山のふちち下市乃里

るおのほいきはれ守山

四百乃月をよみぬお新

秋来ても 畑の土れおつきて

雲雀のまを採乃をえ掛しと

あつくと足の手をさる茶盛

おつくと山より雲いりて

をを

子珊

杉風

桃隣

八葉

芭蕉

几

障

京

芭蕉

几

障

京

芭蕉

几

障

京

芭蕉

五月乃来り飛治の命をい  
流しぬ儀をこころに事とす  
是れ酒座くろく碑の石を  
又つたをさるるの 廿五  
川原も利上りてくるま運一  
よし候し今物ハ輪を系おし  
結構な者をけしや 入る  
見せしるるをくろく 入る  
五分とてくろく 入る  
中々とてくろく 入る  
紫栗の器とくろく 入る  
國つるをくろく 入る  
軍一とてくろく 入る  
糞汲みけしひ儀はくろく 入る  
今の片よとてくろく 入る  
日用乃又器をくろく 入る  
扈從流しとてくろく 入る  
小舟を思生 池乃山子

障 紫 風 珊 葉 障 風 珊 葉 障 風 珊 葉 障

本はしつて終を依くろく  
西日長軍よとてくろく 入る  
旅人の風かきり 在る 毎 曲 入  
ときを思生 池乃山子  
月夜く夜の内裏に月  
鞆向はくろく 入る  
鞆通つとてくろく 入る  
名をさましくに障 入る  
ハ此は後世の備湯乃又  
中々とてくろく 入る  
いすを思生 池乃山子  
あそふとてくろく 入る  
物よとてくろく 入る  
月つる歌の 袖 入る  
秋風乃和とてくろく 入る  
居ゆくろく 入る  
お初儀の盛とてくろく 入る  
巡視死めり 入る

障 紫 風 珊 葉 障 風 珊 葉 障 風 珊 葉 障

何れも蝶の現る未を以たり  
みまふとの力かえん なる草  
羅り甲をいささしくしり  
然望るをいささしくしり  
手事なり紀乃第ちつ頭なり  
酒くくしけりあふまらるらん  
双六乃目そのくきききき  
假乃柿佛よむりよ念佛  
中くよ土間より直ぐ奉り  
赤岩を里れを重しもの  
宿まきくしり舞躍り形を舞  
月夜くくよ唯流さる  
花薄あふりまほけはるく  
唯四方なり草菴に露  
一貫乃結むつくと通り  
政をふの華を飲ぬ分別  
世笑をさるのあふりを  
忙りさるるま乃山中  
五、五、五、五、五、五、五、五、五、五

色義

梅のあまの月と日の出る山河  
處くくく維子れ啼く月野  
家普信と夫の手透るれ  
上れあまのあまのあまの  
宵の月はくくくくくく  
寂寂とねを秋の佛く  
以てくくくくくくくく  
娘を笑ふくくくくくく  
まらるるくくくくくく  
こくくくくくくくくく  
願けくくくくくくくく  
日くくくくくくくくく  
秋夜尼の持病と押くく  
えんくくくくくくくく  
初居よ素排下地着てく  
寄をくくくくくくくく  
町家の住くくくくくく  
門く押くくくくくく  
五、五、五、五、五、五、五、五、五、五

東海をよき囊のいさごと吹雪  
あけぬるまに朧見ゆしぬ  
室の左右向の多重電光石火  
二地ししやれと叫ぶとく  
方く又千松の内乃精の香  
桐の本たたく月さおら  
門志をくくあをひて祥方西雲  
日らわさ金と赤くさ  
とつ年よ世乃おやと振る  
又けあも海ぬ穿人  
法中乃湯治を返ささ  
なごきを下りてま夏の  
この家も東のさよをわけ  
魚り、喰あくは海の雜水  
ふ多啼一歌くはさふたり  
あを乃高のなてぬ美用  
儀へも志しまに城を連てま  
戻内乃危りみゆる一

坂 坂 坂 坂 坂 坂 坂 坂 坂 坂

芭蕉

八九月夜て毎夜やらま  
吾乃り寸代富るあ  
幼高乃る子まのこ  
心をきつく晩の振る  
拍脊り後へ 朧をく  
法樹とてくハ風よ吹水  
孫く流る祖父乃信  
眼指に替くほろろ  
燦を志まるとも  
約束の小島一すけ  
十里とくりの余所く  
毎の善よ小海埋て  
あふる川有と門の  
消く一は後ハ法  
やとよあも  
よのよおるく  
ん事よそり

馬 園 里 芭 蕉 里 芭 蕉 里 芭 蕉 里 芭 蕉 里 芭 蕉

下四

去きてる川筋れり作左史  
 伊勢乃下宮の庭つらと遷  
 昔持よお尋の仲買さくくと  
 へりしとと虎の腹さきま  
 禅ちよ一日あそぶ乃の上  
 柳の角のまてぬや完  
 候おーの午は儀をさそあし  
 をまぬぬあひのうす内代  
 月待は傍茶虎の打そらひ  
 命難の業乃のあそぶさぬく  
 里のてまて桑も板とむつ松  
 伴儀もろる 響乃乃わき  
 割やうは昔刀板のろれれ  
 もあつたよ里乃のあそぶさぬ  
 川まきくおあつたおあつた  
 そつとつ大入りおあつた  
 茶をまやあつたあつた  
 赤うーのろるあつたの水

荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里  
 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里

孤屋

唐豆乃否嘆まう 妻れ嫁  
 壺のあ籍乃ろるも満川 色  
 上法をよきぬほとの雨降く 利  
 ろうでのまけと酒のさの中 水  
 麻下まはしれておあつたの月  
 ころとと嫌のころよ秋くを  
 きりくは朝のつらう唱あて  
 晩乃仕事乃の工史まらさ  
 いまをを能ひおあつた  
 傳教のまらさおあつた  
 風甲お助のつらう唱あて  
 赤の流まらさおあつた  
 飯汁けろるおあつた  
 茶乃買まらさおあつた  
 けまらさおあつた  
 響くーやれまらさおあつた  
 壺の流吹くーたる腹月  
 娘と丸けく物おあつた

荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里  
 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里



石罅な隠之中のワのあなり  
さつち傍をよ上あうりに  
泣るゆいりうまき一はらま  
重口を流さる如くさなる  
意の信をまてて痛を信さる  
客を返さるく悦り娯意  
今ゆきに雪の厚きを掃くはる  
多す大無んさとしめはなる  
身又又祖父のお髪の固きま  
塩悪るぬセク乃思  
若月のまに合きこさ草畑  
まてくくけりて若より新  
けはを霜の圃さうきを記  
山の根際入降くはくし  
よこやまよりよく風の吹か  
晒のくくくき葎嚇く  
赤んよと女子さうき連ま  
余乃ゆら一は草たなる

あ 意 牛 登 あ 牛 登 意 牛 水 意 水 意 牛 登 意 牛

お半畧

色意

夏のおや若くはひら  
赤ハちりりと蓮乃標先曲  
雪のわいつその物まきと  
古更草菟よ反故や  
月影の雪をちりり雪のま  
去るくく積とふり雪かふ  
松と栲場の卵へ追あふ  
山くくろり若とまておに  
飯櫃かり西備まをきか新  
きささくよまをまさる照  
おらるる音は清く橋は  
梅松乃りおよ夕日清く  
平畦又葉を荷さたる  
秋風りり川乃居風呂  
るりて嬉ひさむ月の新  
尾張くくつりてある若  
候好のこくこれあふ  
正月との襟もささく

あ 意 牛 登 意 牛 登 意 牛 水 意 水 意 牛 登 意 牛

素風は善法の花をいれた  
 散々村々ありうら  
 喰ふ子ぬ舞も 累もささ  
 何その付と山伏を風  
 毎つとを樽を付るをささ  
 蕨こはたる糸月照る未  
 お宿せぬをよ 前々本町  
 隊の日和雪乃乃雪を  
 春ころり手とさぬ酒の別  
 言うく乃をとぬあつた  
 射付一文字来るる舟の音  
 そら〜 あ〜 壺の上務  
 虫籠つる四葉の角川河東町  
 言遊とあ〜 表一園  
 今代万々を忍居す橋の上  
 大キと鐘乃乃〜 舟の音  
 盛なるお〜 鹿野〜 舟の音  
 勝つけ〜 岩船の下

舟考 苺考 道考 舟考 道考 舟考 道考 舟考 道考 舟考 道考

妹ま〜 早仇幸〜 舟の音  
 散々村々ありうら  
 甲船を〜 舟の音  
 人走らよる 过乃舟の音  
 船行つ〜 舟の音  
 春挽〜 舟の音  
 舟は福の〜 舟の音  
 雷あ〜 舟の音  
 掛〜 舟の音  
 肌〜 舟の音  
 月〜 舟の音  
 日〜 舟の音  
 舟〜 舟の音  
 舟〜 舟の音  
 舟〜 舟の音

舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考 舟考

行中しく約おろし又六日  
 業を休む喰をり味  
 母歎の仕立く守り嫁入相見  
 急りさしあらし那山伏  
 江戸店を拵く在田の門操  
 麦を煮る島々咽の乾し  
 股引の尻を巻まきり此  
 膏の少ありま竹生む  
 志んくと田の伊予兼渡月  
 心を苦む秋のむよる  
 山畑の本徳文付く世の音  
 石地乃地を帰る気坊  
 怪副き巻弁の太土叫んで  
 かきよを跡を奈良の階上  
 理の流さぬく花を桂慶  
 かきよとる春の咲  
 菓を存ちりしちの雀人  
 上流よ勢ぬすむ白井陰  
 房 志 石 島 希 乃 次 道 肩 志 乃 碩 房 志

探志

御明の消くお事や喜む  
 月さしとる庭のこ孫出  
 族の古ふハ業を荷時介ん  
 多拭帯乃のめらり此  
 廣敷の草履とくよ直まて  
 又こりさる象の焼や  
 窮屋小頼縣中とや  
 山徳の伊賀乃上野の幸徳  
 相争の甚然編うり  
 おま合のおちまりん秋介  
 小島飛り川葛長垣の上  
 名月小借持こちのり度  
 新酒の餅のほきり  
 袴の半ちるん君よこり  
 手のふりやきりきあくる文  
 喉舌の流るるの素く  
 傘下をり雪月の素  
 房 志 道 紅 勇 房 孝 道 志 楚 紅 及 肩 志 房 志

傍る丁かの一紐赤連て  
日さすよ泊る足弱の旅  
見ら申 細工もるも 細佛  
湖水と飲もり 細もさくは  
屋敷ハお輝ある坊田の真  
荒のた〜のつ〜松明  
むさきと大鼓鳴る月るる  
名妹を惜しむ庭の乱菊  
借真や勅の子守をす仕給  
かす〜 ぬ怪を〜 解之  
お細よ男世帯の寺樂好  
たも〜 ことよ 信芸多事よ  
市振の園より 西ハ徳也  
浄福即止〜 志げ〜 志  
風まちよ所系何と吹す  
るふ〜 中〜 鏡を〜 かけ  
待らるる白玉舟の花の 春  
あ〜 了〜 了〜 世軍成ふ

赤 考 紅 志 房 肩 豆 紅 考 赤 考 赤 考 赤 考 赤 考 赤 考

色道

振賣の房あも心〜 多いを情  
降〜 ちやた〜 時ある 朝  
高過う櫻の小帯を〜 して  
行と市山〜 月とるる 利  
好物乃條を流さぬ秋の風  
刺すれあふふ乃春の雲  
細の若を〜 つき〜 夢〜 け〜  
望〜 さん〜 さん〜 二十八日  
い〜 さん〜 さん〜 陣の〜 け〜  
信〜 さん〜 さん〜 頼侯も〜 せぬ  
明志〜 さん〜 さん〜 燈と〜 吹清〜  
肩痛〜 さん〜 さん〜 乃膏茶  
上玉の千系刻む〜 さん〜 さん〜  
ら〜 さん〜 さん〜 日〜 さん〜 さん〜  
約買の七〜 さん〜 さん〜 さん〜  
唄〜 さん〜 さん〜 さん〜 さん〜  
山崎の鏡鬼も〜 さん〜 さん〜  
砂〜 さん〜 さん〜 さん〜 さん〜

赤 考 紅 志 房 肩 豆 紅 考 赤 考 赤 考 赤 考 赤 考 赤 考

新烟乃舊もあらはく雪の上  
吹くくふるく 雲もふり  
川城の葉もけをあらはく  
平蛇乃ちかへるもさき枝垣  
干物と日向のさくもさきさく  
塩あま鴨乃乃苞不とくく  
算用は浮世とさる糸俵后  
又少法師一もむもめ産  
さくくくとち海日も四つの陸  
草手れたのむ状のあと先  
中絶くく傍革命の信りの  
聲をまもあまう静きぬ夕月  
風やまて秋の踏の履さうり  
親乃乃唱子れ継をいしゆる  
ちくほくも茶の楊場の刈り  
目黒川ありのつきの裾らとちく  
くくくも草茶代三月中分  
湯屋のちくを拂ふま風

牛 舌 扱 煮 全 牛 煮 扱 牛 舌 扱 煮 舌 牛 舌 扱 牛 舌

猿蓑よりゆるる雲の松露外  
日と雲もゆるしと 舞うらる 雲  
あかき一他の中らりあして  
篠井あり一飯茶をいしゆる  
鶴うあうをさやうくさうの月  
あうのかきふえ世うらり秋  
分豆まをい一さあてあまう鶴の魚  
豆麻の上腰をなり一まきう  
舞う年まふ川ともさきよ物候  
中まらりの状乃乃古た太  
翔日の日々とこやう振音さ  
一重羽織うさくもつぬる  
ささくけあま茶家の比乃根相  
山くく門はる右明乃乃月  
初あり一留代人のさけまかり  
お原まふる候乃乃小編  
足てる言紀之并はあひのつりり  
荷持ひしうまひし水日

佐園

芭蕉  
支考  
惟然

青 煮 然 舌 煮 吟 考 煮 然 考 煮 然 考 煮 吟 考 煮

東風うきをの又二重あり其あり  
 わらうきよの胸をたもようし  
 後呼の代依の之友屋敷う  
 喧嘩乃ききもむきときし  
 大井川系日二日五番の積  
 言なきか——中のさうり  
 あり極の系掛の皆出ぬ  
 奥代世華と近年乃他  
 酒よりも昔れやきし月石  
 赤鶏の皮を 産乃 正西  
 定よりぬ娘のうらな吉川の  
 麻斤乃さゆら之物さの夏  
 多霧とほくまとおき松の風  
 大工きひの奥よりいぬ  
 系掛をさかひりしきし海さ  
 うらぬさく市乃中を揮あ  
 はあさりほ生ハ花のほる  
 鴨乃油のまじぬ多勢力夫

考 吟 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考

五月八日 奥 杉風自筆  
右

流の形うら枯家あり系  
 宿もつれぬ店毎戸さうり  
 之味係さる係縁の之食  
 夕月夜宵豆湯ききま  
 会さるる係 粘きま  
 舌の舌の系れさきかき  
 力かり胸ほれうら——係思ひ  
 係かかひしる記 系物  
 自佛も六事さきま  
 翼さるはほめくかゆも難け  
 物乃係係さるのお物  
 伏見乃係し系の名  
 懐さるさる入るさる  
 親仁くさるさる  
 月をの青う仕込さる  
 物さるさる係ははさる

考 吟 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考 意 吟 考

藤原のときくふるき風の  
 門の乃五身とさきういん様  
 時の乃は一むし雨の降置了  
 藤原も琵琶をさす増丸  
 鳥つふ内おきまひ志きかこ  
 雲の毎日の山とさう美り  
 入りき松すぬくの竹藤  
 佛のおと排ハ清きし  
 黒紅の小神と標のあつさ  
 ラスの幕屍とま買よささる  
 ちり狩れ二階と店名よらさ  
 月夜腐よ癩痢をささく  
 柳のまの一まをぬきさる  
 諸のゆつ々袖の切形  
 秋の倉年くさる藤切  
 在か怪まき流ぬぬさ  
 石公依ま花咲山のぼり三位  
 田舎けさるうな中のみさ

苑 苑 園 苑 園 苑 園 苑 園 苑 園 苑 園 苑 園

銭列

山店

新麦ハワキとせめぬそ逢外  
 中々お故春の度とらるうく  
 高村とるく佛飯敷の壁  
 四五千名乃松のあつ山  
 力く一堅まをさしさる月の  
 踊の作法持とおほえを  
 盆色ののびさる古の善信  
 ぼりうれ者よ菊とるさ  
 蓮せよ志と止る男さ  
 ぼ乃鳴おれかゆき南系  
 舟はくし像とるく啼うけ  
 舟季の事乃と利上まきぬ  
 言よ生く土器賣と追ちり  
 只石中に月そさえぬれ  
 電乃ひつううう海法とる  
 志やうう止人さぬく怪おぬ  
 奥の院おぬく是と指のそき  
 介ねくおとらうく此のそき

店 苑 店 苑 店 苑 店 苑 店 苑 店 苑 店 苑 店

甚れ日下屋敷の何れは...  
 から... や湯...  
 ... 目...  
 ... 佛の本地...  
 ... 羽...  
 ... 若...  
 ... 日...  
 ... 花...  
 ... 夜...

店、店、店、店、店、店、店、店、店、店、店、店、店、店

史邦

惟子ハ目... 冷... 鴨の...

一... 稻乃... 價... 色...  
 ... 其の種子... 油の...  
 ... 石下...  
 ... 秋...  
 ... 土...  
 ... 小...

水、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦、邦



竹橋の心より春心 龍 完 邦  
 言れ糞橋く彼と常り  
 夕暮に洗滌僧を投はく  
 とそぬとつらー 雲の吊  
 腕うよ来れとおや 表傳  
 世あてくさる日ハ時あし  
 お世ハのまろ麻とる掃  
 百里その海 舟の夜く  
 月刻し土佐橋本代行思ハ  
 宮をそまねぬ中々生盤  
 以つて極路よ余なき月の書  
 ちよよと倚く鴨のれつハ  
 摺飾は柱くまけく庵幸  
 隣子思ぬぬる布碧の舟  
 水南雲降雲のりりつら  
 二夜三日の終らあふふ  
 老若と手し望まろの志 燈  
 百姓やまそ苗しらの障

道 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

後の月見道庵

とそぬ

十三夜院署れとー免えれ  
 小袖乃綃のこりな為給 色  
 焚飯よ丸乃袖漬口咽言 色  
 荏胡麻のうに甲十雀つ、史邦  
 雨傘はくさ下菜の志め合 松風  
 こみく流止風呂乃あき 盆水  
 切麦を子初彩よあまき 涼葉  
 来子依りて柔橋の昇 道  
 松松をまけと掛り寺の門 良  
 心くまやや免れ冬のことく 子  
 番乃身をもかきぬ意を引 道  
 なまろくまし橡葉く 道  
 為月夜麻乃夜の氣法陣 邦  
 有倚きとー 菊 割ら秋 邦  
 未唐を釘よをさる 孫宣の表 子  
 茶やとらよ 斤 窓の燈つと 系  
 先けと常とそーむら初切よ 道  
 うと比と啼く徳よる止元 邦

邦 道 系 子 邦 道 邦 道 邦 道 邦 道 邦 道 邦 邦

麻尾み毛袴とうとく一帯切  
中緒くちらむはるひさえ  
是足是子履字は徳場のあり  
形はは 似とぬあしあうの好  
髪をゆる居旅の牡丹足て燧  
あはさきま川くちをさき子  
是うりしきれ道なまの所  
是ハむくみてはる月く  
まはるる衣は満家家の打き居  
伯母のちりけり砂人の教  
子の月言性け梨の穂けり  
枝もく菊乃うまくらひさま  
赤あやま土こそけり書のう  
くをほそ名まあうる看登  
初春ハ思ひのかよ安う中より  
信一 疾風と海を夕暮  
あま又花をうしり一う空種  
まうぬく乃乃のありま

邦 柴 代 水 子 茶 良 子 意 良 邦 水 邦 景 志 水

路通

水仙ハ尼の宿をまよゆる危  
窓ハ神国より一帯く一帯  
我猫よの描通不啼のひく  
ほー けりけり 指法の月  
権小のぬ糸瓜の叩みあひ  
仁と心けりけり白鳥  
舞ハよ系賣り巴ををを  
あう古風乃舞の奥飾  
免了しきままはるる白鳥  
ねとぬくくそ川海の子  
川里よ揚つる一帯り布とうる  
併そやうと重くあ月乃片  
けりくく系賣り梅の春の春  
一むれあう家 居けり家  
おふりけり屋をまじり物中  
乱れけり後と初ぬ手号  
枝徳や亭下よと海と志の更  
言乃場とあまうるる

通 川 通 仙 皆 通 仙 皆 泉 執 業 泉 仙 皆 通 仙 皆 通 仙 皆

世を乃らうと浮世まうして  
彼岸より風と静かなゆえ  
ゆきちりやまゝ舟に似る存し  
いもぬありのいゝの知れぬ海客  
えんかのほつとくさるるあま  
人乃れ信を櫂より築くく  
深つて薪吟秋の思へさげ  
陀鉢さうた本曾乃縁の書  
月の宿亭まらうつぎ物あま  
朽ちあふ舟の了こ他正多  
唐人の志乃ぬ初よりならあて  
志らうく信よりあまうへる信  
何立しうもは原日之ぬえり  
境乃あをと信より信む書  
明木の當年の上まゝく舟  
赤きうしとと持る書柳  
美さかり静る書を能見そ  
うそ死す静る中まらうの静

道 仙 宿 通 川 皆 通 通 仙 通 仙 宿 通 仙 道

書正にうめらうあわむ信居  
きやうくきく浦の信やま  
まぬく乃美のむ手たが  
そしそく居のあむく食  
のそくして兼舟梅吟初月夜  
瓢箪茶山 書乃あまま  
一里ハその何らうの静さひく  
尺もくしてらん静かなる全  
あまもま物と夜のあま松  
うそあく静る舟のあまうけ  
宿らうくは信う川さ三舟白静  
ちりうもらあまの信一信  
放すん静るま牛のゆも凍  
つらへまささ静のまつ戸  
西川の信と洋を浦の月  
まらうまらうしん静の信の書  
あまをと朽木のあま静さく  
書乃あまのあま母信のあま

宿 仙 宿 通 川 皆 通 通 仙 通 仙 宿 通 仙 道

竹賣の虎をのろふ夫旅の望  
望はあまふとてしるるなる  
後の世に罪と名をりし毒を  
九指ハあゝさる石の埃  
下ふの松こく作し吹ありし  
むくら半とと砂と中月  
秋きく哀をうまのう  
瘦く成乳をまほらあつと  
とまめおは猶もいふを改る心  
極々小書も情をうり  
その後より削りて便と作たの心  
生本燃しとくあゝ秋の目  
斤くハ袖ちふさふさからけむ  
悴にふ人ほえとくし  
貧乏下あまふと名をりし  
峯より猿乃小猿子とひく  
優優磨く花ををやうとく人  
麻乃相およつと山書

系 又 糸 又 竹 糸 良 色 為 糸 西 竹 糸 又 竹 糸

雪の歌に休むの終よあつて  
花屋をとこをせぬ梅の子候  
うら海とゆふ酒の合干て  
貴帝 あまふと名をりし  
あらひる舟乃赤柳と砂の月  
火とあゝ名をりし  
とくくとくおとくを改る心  
朝日とむくくさく  
生つつきとあゝ名をりし  
親よりとくとく名をりし  
世のこゝろを名をりし  
美乃あゝ名をりし  
富士備あゝ名をりし  
母乃侍と名をりし  
産物と名をりし  
酒と名をりし  
やまゝあゝ名をりし

西 糸 又 竹 糸 良 色 為 糸 西 竹 糸 又 竹 糸

初秋ハヤミ、権子のきききき  
 販りつひくぬくむひの  
 まんを子路乃良のう月々ま  
 びりふあふつらあみつら  
 まきつら根根まきつらあみ  
 うたうまきつらあみあみ  
 刈はまきつらあみあみ  
 あつらあみあみあみ  
 権山まあふは乃新らあみ  
 こまきつらあみあみ  
 赤みつらあみあみ  
 かまきつらあみあみ  
 文字ひつらあみあみ  
 まなこつらあみあみ  
 傍をうき世傍まきつらあみ  
 百賣くつらあみあみ  
 花よ新次男まきつらあみ  
 かまきつらあみあみ

大庭庵の田舎

篇

えけうちんを枯木の枝の長  
 りつらあみあみあみ  
 兼ねまみの作つらあみあみ  
 風乃志まきつらあみあみ  
 同洞のくほつらあみあみ  
 油屋をかくつらあみあみ  
 つらあみあみあみ  
 あまあまあまあま  
 長きつらあみあみ  
 秀の美つらあみあみ  
 いらあみあみあみ  
 隣を新らあみあみ  
 萩の月乃あみあみ  
 地つらあみあみ  
 いらあみあみ  
 寺つらあみあみ  
 岸の橋つらあみあみ  
 のけり小紙つらあみあみ

つゝきやれほ麻となくて日記一  
良乃ほろりなとむむこの子  
森とむむくくそとまの心  
様ハ木末乃松とまてこの月  
苔とて——松の篠と松とて  
まよとあまひくそとぬをゆめ  
あつ神よりさおふむ月の影  
典——くぬまや葉の一株  
赤あほまそふ乃徳の戸を咽く  
身と夢代とてふの縁——けり  
位白まをさうらまふてけのたまわ  
赤まよとそらぬ娘師なるん  
師の居を覚へん人まぬくまら  
藤とそとまぬ庭乃砂喃  
くあつるひきの竹師の之  
けままてけくかかち後招  
法まほの骨をぬらまの陰  
まてけくけり考れ一時

葉 良 菊 云 直 葉 良 菊 不 菊 葉 在 葉 良 不 菊 在 葉

蠟畫あそや秘秘乃日敷れ 野  
着れ——ぬくかさひの皺 為  
小折をさるぬ糸よを捲く 路 在  
神——くまはる象のそつ了 史 邦  
一画みそはる果る物月—— 大 州  
あつそらつくとせれちてら  
まぬくまぬぬ金目ひ兼 為 葉  
ゆあまひよあつあつりま  
物予のそひひまてあや—— 葉 邦  
たまそらへ——さの小音 葉 邦  
中まをひきちる者——立 破  
清さうかハ寸早乙サのさハ  
石仏のつまぐぬぬちうらう  
半代骨くそま川くそまや  
浜の浦くそ人あまぐハ碑まう  
室乃ハくゆま君あひけ  
みられくそま——月のさあま  
唾まふま似るころの雪

重 葉 通 葉 邦 葉 為 葉 在 葉 邦 葉 為 葉 在 葉 邦 葉 為 葉 在 葉



水乃方乃燈籠子のころ雲  
 松比のさうへに白くはるる年  
 西入の山中破巻き札さく  
 物乃陰よりおきしり音  
 婿——き——さもるを指し  
 いさかちをるを舞もあつた  
 ひきり——相の松もまもり  
 薫も姓も言もなれど  
 くけ命もやして通る祥あき  
 山由あまの中立ち乃門  
 中の虎とく——名あつた  
 高乃仏の命あまになり  
 垣より湯あつたあつた  
 少童のむつまじり物あつた  
 傘たむまじり老のさやれ  
 経一口をもくぬ舞の目  
 衣あつたあつたあつた  
 何くつろきくたうる物

末童翁邦丈赤末童翁邦丈赤

幽紫云

幽紫

楚ハ雲々河豚の罪とあつた

千川

やうに雲乃乃鳴きぬあつた

赤

門島の藤鳥の影月とく

宗波

夕さむさう神家あ裁の持

山節

秋風と雲とあつた

喝子

史も雨歌ハ目さえく

川

別室く産のこころに

子

多幸なと雲と付く悔め

子

尼も乃老尼ハ独髪刺く

花

命も乃ハ薄のこころに

川

掛後と小神の傲とく

川

食乃雲と園乃あつた

川

見ら度ハ源氏一筋の思く

川

指くくさせれや臣は偉心

川

何あおも伊セの斜理とあつた

川

禰足くあつた内庭の砂

川

釣月と雲の糸知と川さ立

川

日影の影乃雲と川さ立

川



石を巻く病のたぐはくは  
地は乃の掃ふる西の方苗字  
まをいそぐぬ麻の巻を志す心  
ち此いくく西又反の秋  
中の月を極小はうおと露の破を  
見よあ巻をうまうのり一糸  
先を能く出依頼の一繩手  
着く病の内は帷子乃子  
くうきくくまはる歳をきくく  
表々をなまき遠の影目  
之巻乃をくくく西の方  
茶や乃三階ハ酒乃掃若  
英くくくくくくくくくく  
恨乃のくくくくくくくく  
ま喉を又又又又又又又又  
百荷うくくくくくくくく  
徳を産夕日とくくくくく  
きくくくくくくくくくく

柳 紫 爲 川 海 爲 紫 柳 川 爲 紫 柳 爲 紫 柳 爲 紫

蕉菴會

添紫

月流のまをくくくくく  
縁乃のまをくくくくく  
砂川のまをくくくくく  
門ちうくくくくく  
月の影ハ足あぬをくくく  
きりくくくくくくくく  
庫裏燈のまをくくくく  
ぬらみいりりりりりりり  
三つめりりりりりりり  
かもあるくくくくく  
い柳を痛くくくくく  
よ傍と有りくくくく  
入新をくくくくく  
壇を荷くくくくく  
蟬又備くくくくく  
小船乃文を送る 村  
けくくくくくくくく  
ち乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

山 誰 紫 爲 川 海 爲 紫 柳 川 爲 紫 柳 爲 紫 柳 爲 紫

入角と四蝶の似きく行いりき  
 行をききけを乞食をき  
 長うぬ舞人糸此賣所  
 又とく一ふく<sup>一</sup>恒指<sup>一</sup>き  
 火桶<sup>一</sup>く<sup>一</sup>藤<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>松<sup>一</sup>の<sup>一</sup>暮<sup>一</sup>清<sup>一</sup>州<sup>一</sup>  
 蒼<sup>一</sup>麦<sup>一</sup>此<sup>一</sup>粉<sup>一</sup>き<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>の<sup>一</sup>日<sup>一</sup>の<sup>一</sup>報<sup>一</sup>  
 近<sup>一</sup>の<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>手<sup>一</sup>押<sup>一</sup>と<sup>一</sup>振<sup>一</sup>と<sup>一</sup>持<sup>一</sup>人<sup>一</sup>  
 和<sup>一</sup>け<sup>一</sup>の<sup>一</sup>面<sup>一</sup>を<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>の<sup>一</sup>お<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>き  
 高<sup>一</sup>け<sup>一</sup>の<sup>一</sup>風<sup>一</sup>を<sup>一</sup>き<sup>一</sup>か<sup>一</sup>り<sup>一</sup>伊<sup>一</sup>世<sup>一</sup>の<sup>一</sup>江<sup>一</sup>師<sup>一</sup>  
 先<sup>一</sup>日<sup>一</sup>お<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>き<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>申<sup>一</sup>の<sup>一</sup>所<sup>一</sup>  
 持<sup>一</sup>た<sup>一</sup>る<sup>一</sup>の<sup>一</sup>面<sup>一</sup>を<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>の<sup>一</sup>お<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>き  
 福<sup>一</sup>州<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>き<sup>一</sup>く<sup>一</sup>小<sup>一</sup>舟<sup>一</sup>系<sup>一</sup>込<sup>一</sup>  
 物<sup>一</sup>の<sup>一</sup>尾<sup>一</sup>房<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>る<sup>一</sup>雄<sup>一</sup>の<sup>一</sup>臺<sup>一</sup>  
 雄<sup>一</sup>水<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>老<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>お<sup>一</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>一<sup>一</sup>流<sup>一</sup>  
 成<sup>一</sup>後<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>中<sup>一</sup>を<sup>一</sup>座<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>く<sup>一</sup>  
 操<sup>一</sup>場<sup>一</sup>を<sup>一</sup>一<sup>一</sup>の<sup>一</sup>酒<sup>一</sup>中<sup>一</sup>に<sup>一</sup>は<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>く<sup>一</sup>  
 や<sup>一</sup>も<sup>一</sup>や<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>有<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>送<sup>一</sup>る<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>の<sup>一</sup>音<sup>一</sup>  
 葉<sup>一</sup>を<sup>一</sup>吟<sup>一</sup>香<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>み<sup>一</sup>情<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>

紫 山 翁 山 系 紫 系 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

此は元日光の時代東朝のあつた  
 應永の園田氏のあつた所

係乃のあつた所を<sup>一</sup>一<sup>一</sup>流<sup>一</sup>  
 牡丹のま<sup>一</sup>と<sup>一</sup>洋<sup>一</sup>を<sup>一</sup>廣<sup>一</sup>場<sup>一</sup>  
 短<sup>一</sup>歌<sup>一</sup>も<sup>一</sup>月<sup>一</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>形<sup>一</sup>を<sup>一</sup>く<sup>一</sup>  
 破<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>く<sup>一</sup>既<sup>一</sup>に<sup>一</sup>移<sup>一</sup>と<sup>一</sup>  
 雪<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>事<sup>一</sup>の<sup>一</sup>む<sup>一</sup>る<sup>一</sup>此<sup>一</sup>冬<sup>一</sup>兼<sup>一</sup>  
 出<sup>一</sup>口<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>登<sup>一</sup>山<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>砂<sup>一</sup>  
 吹<sup>一</sup>倒<sup>一</sup>を<sup>一</sup>松<sup>一</sup>と<sup>一</sup>前<sup>一</sup>を<sup>一</sup>く<sup>一</sup>け<sup>一</sup>る<sup>一</sup>  
 い<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>と<sup>一</sup>系<sup>一</sup>若<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>端<sup>一</sup>此<sup>一</sup>家<sup>一</sup>  
 六<sup>一</sup>の<sup>一</sup>子<sup>一</sup>此<sup>一</sup>告<sup>一</sup>す<sup>一</sup>ぬ<sup>一</sup>終<sup>一</sup>絶<sup>一</sup>  
 稍<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>和<sup>一</sup>と<sup>一</sup>か<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>也<sup>一</sup>是<sup>一</sup>  
 家<sup>一</sup>か<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>曹<sup>一</sup>細<sup>一</sup>此<sup>一</sup>甲<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>勤<sup>一</sup>  
 衆<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>き<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>也<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>代<sup>一</sup>  
 生<sup>一</sup>る<sup>一</sup>も<sup>一</sup>朝<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>終<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>は<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>  
 着<sup>一</sup>る<sup>一</sup>も<sup>一</sup>若<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>先<sup>一</sup>も<sup>一</sup>也<sup>一</sup>  
 巡<sup>一</sup>行<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ゆ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>旅<sup>一</sup>の<sup>一</sup>物<sup>一</sup>を<sup>一</sup>り<sup>一</sup>  
 兄<sup>一</sup>より<sup>一</sup>兄<sup>一</sup>より<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>の<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>  
 志<sup>一</sup>石<sup>一</sup>ん<sup>一</sup>と<sup>一</sup>か<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>も<sup>一</sup>り<sup>一</sup>  
 狂<sup>一</sup>と<sup>一</sup>極<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>

千 川 系 紫 系 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

香階踏手の香を急ぐ  
さうさくさく万片亦乃始い  
陽子の階下千石を傍ぎ  
窓乃やふき入る水風  
淋しきまきみ筋ききもきき  
旁乃難き 何時の山 荏糸  
秋富道 貫乃 筆子 刈 初  
ほる乃 門を あくく 月の 萩  
人足のや 同き 亦さ 流く 大舟  
ふとさ 神く 差を 石を けり  
きむと 日 花 ぬい 死 取  
降か 雨さ さいく 蝶乃 香  
身身の 髪に 糸並を 結く  
空乃 如や 来一 門の 金物  
院門は 空 流川 内 百 流の 夢  
この 一と 交ぬく や 雲 羊 糸  
けき 川の 川より 雲 衣 志 の 陰  
桂乃 せい の み 甲の 苗 代  
糸 花 川 茶 舟 柳 節 糸 茶 川 糸

山人扶掖うてあさき 挿之乳 野 田

猿門の月を力よ 山 歌く  
えらうと けり 雛子の 誓ひ  
暖かきうても ぬゆの 糸  
埴利 白のく 砂を 買子ゆく  
丸もと 七 穂う 藤く 藤うさ  
境の 公 草の 入る 昔きぬ  
志 白く 松も 指し 鳥の 翼  
うさ 世乃 中を 終く 藤 夢  
瘦 梳を 髪と 一白 搦 志 糸  
やふ 入 せよと なる 水 けく 丘  
籍 階と 類う ち なる 秋 糸  
相 打 初を け 居る 月 糸  
口く 糸と 糸の 酒を 試 糸  
色い 佛く 羽乃 どの 火  
咲 糸よ 十 符の 葉 菰 糸 有る  
と や 葉 細を 摘 志 糸 有る  
糸 花 川 茶 舟 柳 節 糸 茶 川 糸

けつくと使ふぬある其の肉  
 残のちよ夕日ちりりく  
 けい徳せよ子世を存す  
 焼味噴乃灰吹ちい  
 一掃り掃り集りそりけ快  
 ちよ粉雪乃そのさと  
 おくちを著け中居り  
 むしの葉糖ふの葉やむ  
 市ありそとと奇れり子  
 林おろすふ夜、そのい  
 月影よ小岸仲乃のささい  
 著るま新まを著る机を  
 ちりくと桐の葉落る水神  
 身付くある登の踏古日  
 やりしとうき記さゆ葉あり  
 猫可愛くると恋し  
 おのせれちぬまあるふ  
 第目のくまをくこれ様  
 執事 爲 坡 爲 坡 、 爲 、 坡 、 爲 、 坡 、 爲 、 皮 爲

史部

朝魚や飛ハゆきり一葉の色  
 おのきくと別ちきやむ  
 岸前あぬ月に出り  
 岸下口ましくゆるす板の岸  
 はやりとほよ鳥子の雲を  
 栗丸をきぶ川上入り山  
 こりくと歌のおうさる拾ふ  
 ちりりかつりて出る麦食  
 雨とく白くまる葉のむ  
 祖父乃ぬくまの葉よそう  
 子供皆もろそ神と名を呼く  
 後ちをかくる手紙乃ま  
 さりくと雪むるの爲ゆ  
 目世を著るさく日刻かす  
 鉄指を戸障の木の得る鋸  
 後皮病乃ちやま古川あり  
 ちりすと苗代ゆく葉の色  
 光るちよぬ伊勢の有明  
 可 圃 爲 可 邦 圃 可 爲 圃 刊 爲 可 邦 圃 魯 可 沽 圃

五月の月夜はあけぼの光さす  
影うつりたるも 百歳の影  
色づきく渡りたる白く化す  
葉のしづかき 白雲の影さ  
穉土原離れさすさける薄の色  
赤雲のくく 車の底を満  
憂子の代後 一歩を歩き  
名古も 秋の兼裁の才子  
かつけたるお祭の松のろくよ  
杖をぬりたる月の月蝕  
おまじのよき之 樹の影さ  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児  
あけぼの光さす さまの児

邦 園 邦 園 邦 園 邦 園 邦 園 邦 園 邦 園 邦 園

芭蕉

言根誠を今あき けきの書  
船の焼火を 今 雲の系  
云は下布綱下きお忍えて  
扱むは 房の房の中ゆく  
まのあまの房の房の房の房  
都くくを あくを 今之の夜  
性子は 給羽織も 扱めまて  
合早橋くさき 田舎さき  
神皇も 常火くさき 鳥帽子さ  
橋のくさき 扱の 下 剛  
さやくと 還所の 扱 露物  
治原のくさき 扱 今 佛  
志のいへるを 扱 扱 扱  
浮名志れつる 月の 扱  
長き 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱  
人 扱 扱 扱 扱 扱

こゝろは人の心くちの事あり  
おろしおとんとてさかかく  
下をほ生千のれ解得り  
あさつき路の人の身さよ  
まろくくと一藤へて目のま  
堂もろ雨れ程通るし 男  
ころはくちを登雲の影く  
楚の鬼をくくく みのむの父  
布衣破き以片乃れ始乃風  
松し片れ月松海乃月  
ふつくくして余乃てまを忘る  
妻産 戸くく 産く 陽く 勞  
泣くくして志くく ける 果る  
あくく ぬめ乃か 刺く ぎ  
世の中代系各賣社舞 此  
福あつき 産く けり けり  
縁衣尾張の西れ十萬  
富士画く けり けり けり  
猿子 登 けり 系 おろし  
く けり けり 柳 流 けり

人 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

馬有

夕鳥や蔓又場とより夜夢  
西日をふくく 枝乃下州 翁  
ちくくくと海原の細のつらき 惟衆  
馬のまろくく けり けり けり けり  
一ひく けり けり けり けり けり  
程く 種 夢 けり 産 けり けり  
松茸も小侍も けり けり けり けり  
ほくく けり けり けり けり けり  
馬のけり けり けり けり けり  
縁乃れ けり けり けり けり けり  
物けり けり けり けり けり けり  
今の男も 何 けり けり けり けり  
めくくくと けり けり けり けり けり  
茶けり けり けり けり けり けり  
月影も けり けり けり けり けり  
雪乃 けり けり けり けり けり  
おの けり けり けり けり けり  
お中 けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

下七

物をも甲をほゑるのあらば  
 俣歩乃歩乃料理せん  
 榻代をばせし流と風の留ほ  
 尻もむさばハ男虚云えり  
 腰衣と衣後と成り青の月  
 まましくはあさや種の中  
 如行 魁も子国が裏あさく  
 松屋 合馬乃ゆハ男電れあさ  
 其 服及と背の結れさき  
 其 本も抱背くのそく  
 其 伴山まなりあさく  
 其 日やさあさとし  
 其 上田のおま  
 其 其の服も响方  
 其 荒川あさく  
 其 深あいみの  
 其 け月あさく  
 其 むうり  
 其 ありハ男を  
 其 等 行 始 星 川 屋 始 行

上巻

西中

もと

傘ふ押分りたりや  
 若そこころ心  
 撥月  
 火の  
 洗濯  
 はめ  
 雨  
 馬  
 秋  
 鼻  
 在  
 瓢

子 子

春の宮十萬壽代時〜〜  
 御平はわ〜〜情む様を日  
 嘗岸のい〜〜ハ雨を〜〜もた  
 先手を海ゆ〜 宿の〜〜つぎ  
 むつ〜〜交り〜〜名を〜〜  
 此く〜〜は〜〜鏡乃〜〜晴お  
 祝文も母〜〜く〜〜究め〜〜  
 本つ〜〜娘〜〜る〜〜川〜〜安の里  
 足場よ〜〜きの月の細〜〜一〜〜  
 麻道よ〜〜夢のゆ〜〜め〜〜  
 念仏よ〜〜サキ〜〜証ハ〜〜跡〜〜あ〜〜  
 四月十日は〜〜病〜〜あ〜〜く〜〜  
 救済と〜〜妻〜〜延〜〜る〜〜  
 荷〜〜め〜〜この〜〜と〜〜山〜〜横〜〜賣  
 男子花遊ハ〜〜仕事〜〜と〜〜魚の〜〜  
 席ハ〜〜と〜〜ヤ〜〜〜〜  
 切〜〜く〜〜も〜〜本〜〜を〜〜  
 う〜〜多〜〜海〜〜の〜〜る〜〜  
 名の細滝

坂 牛 意 茶 坡 牛 意 子 良 牛 良 坡 牛 良 坂 牛 良 坂

酉寅月

一七

芹焼や〜〜其の四升代御求  
 琴〜〜と〜〜寒〜〜 卯〜〜心〜〜鶏 湯子  
 織おら〜〜と〜〜緒を〜〜延〜〜る〜〜  
 折〜〜く〜〜と〜〜心〜〜裏ハ〜〜  
 智目取干〜〜纏傍乃〜〜  
 伊〜〜心〜〜牛〜〜と〜〜女〜〜  
 秀吾入〜〜小村〜〜を〜〜  
 板の〜〜と〜〜  
 あ〜〜さ〜〜り〜〜  
 場ハ〜〜から〜〜  
 日登ハ〜〜  
 和回〜〜  
 柳乞の〜〜  
 古〜〜  
 破〜〜

茶 子 意 茶 子 意 茶 子 意 茶 子 意 茶 子 意 茶 子 意 茶



言ふハ春やうと紫竹く  
 日記清き一帖の紙  
 縁癒やまふ中月の赤白  
 名付たりまゝく安藤の唐紙  
 春伝ハ元氣の白紙とる  
 え来たり酒乃の影  
 焼くそく庭に纏るるの月  
 巻草果すこと 帆多さ月  
 春聲ハ後徳太史とまはけ  
 夏より冬を度の中くまはけ  
 結崎とく庭とく唐紙海やう  
 紫菜とまはけ不と床の片隅  
 杜宇生いやと故やと約んて  
 湖の毛さくむ波田の物言  
 為言の上ままのころくと  
 儀乃の香とくくちるもの  
 おぢのま子供のまらる袋町  
 のり松 桂も 乙柿のま

子 系 菖 子 紫 菖 子 紫 菖 子 紫 菖 子 紫 菖 子 紫 菖

左研會

まく咲け九日と道一者の葉  
 かくまゝの川青月の家 花柳  
 新島まのの勢の啼かく路通  
 ましくとくく山乃むさる文鳥  
 酒肴のせせり 雉子とめさる 誠人  
 なほおのりくく文を和らと如行  
 足の葉たそく脚をまめさる 荊口  
 かきく 汲問まこく 倉くまめ 山筋  
 二人め代書よまやあぬし人 木周  
 夕夜に纏る 寝まこまら 油香  
 急角くそく庭に纏るの心く 草良  
 夕宵乃うらり代書まら 山折 料旅  
 飽果一様とく白意く 柳  
 虫ぬまやかみても目も咲き居  
 月宵く庭中あやそかかき之  
 曉うはれぬ 秋乃 糸別  
 一様まあけらる 山の花さく  
 壺まこく心春のめらみえ

人 色 口 香 菖 柳 料 旅 山 折 糸 別 花 さ く

萬葉のまゝに平のいふごとく  
村を川をさゆく友の遊  
所まぐれ神の居や母あや  
二代上子の遊をうりうり  
物うれきまほとむつら  
鳥帽子かいらぬ髪も高そ  
みらなりあそびのたふし  
系乃のさくやうに子業の  
勇しくあそびつゝあそび  
危なる人さ青のまぬく  
月影よふらひとやうに遠  
藉りとあそび一々の藉  
何事もあそびと仕りて  
遊子とほれよさを素直  
丸腰の袴の中くあそび  
その決しる母の涙さ  
花乃陰うぬくとの仮枕  
梅山吹く子あそび

同 旅 音 良 村 香 人 通 口 海 良 馬 因 切 旅

居士山田氏のまゝ

たむけ

水鶏啼く人の心もや枕屋泊  
昔乃あそびをあそびたあそ  
初月よ向の答相をあそび  
遊子の内をいふ家生との  
さそよ暖簾さう合月の穂  
あそび 後 橋 舟 の 影  
耕作のあそびをいふあそ  
豆膏味のあそび伝流海を  
尾波の絶うりあそびあそ  
西代後日をあそびあそ  
地蔵乃のあそびあそ  
蘭と刈あそびあそ  
切あそびあそびあそ  
川流乃のあそびあそ  
うそあそびあそびあそ  
袖うあそびあそ  
あそびあそびあそ  
あそびあそびあそ  
あそびあそびあそ

川 旅 音 良 村 香 人 通 口 海 良 馬 因 切 旅

小波録の御坊と見たりて  
舟の自由、ま日よゆく  
月夜をり物毎志よき世の傍  
習もあ射の丘と傍こむ  
三石の云伝よりる秋の風  
紋をもあつく川りあすむ  
衣冠とをさく草も山も介  
道徳の夜枕、殊よりて寐  
あま下戸いちこの柳を柳  
まふり傍のまよあまて  
金剛、一世の時りそい盛  
清くは木瓜乃照りて  
さるの影もやゑるては唐き白川  
二傷つ事くく百代移る  
そはくく男女もあそり一  
ふあく女生もり娘、まあ  
有明、百屋もりつる秋の夜  
まへと白の柳乃木川耳

文次 考 徳 川 次 次 考 徳 川 次 考 徳 川 次

具はつし柳よりて一の仙を  
土原、い一屋乃有、ふ為雪  
おろ、備有、ま鳥、けまら  
ちやの屋前の鳴くさる  
洗滌乃い、を雪、雪の月  
望老より、はま、くくさ、美  
掃下、ま、ひ、集、い、押、く  
伊、く、い、屋、一、舞、ま、え、雪  
の、後、目、ま、あ、る、ま、を、め、く  
ま、古、乃、は、は、も、ま、た、ま、あ、ら、秋  
花、ま、ま、の、ま、あ、切、色、の、ま、柳  
顔、や、あ、ま、る、ま、あ、ま、れ、月  
松、乃、進、ま、く、梅、ま、あ、る、ま、る  
雪、ま、ま、の、ま、あ、ま、ま、も、踏、立  
春、ま、ま、の、ま、あ、化、形、の、ま、あ、ま、け  
二、月、乃、雛、の、ま、あ、つ、け、ま、あ、ひ

白雲 柳降 芦ノ 支考 以之 扇車 汽水 柳先 柳後 柳殺 雪丸 雪 春 之 先

おりのりきまの市のけり  
小細き心細きとよめる  
黒漆乃漆乃鳥の鳴連く  
雨乃音しよの西乃漆乃下  
亀乃側よあきく目と雲  
松乃乃培れきる。福乃  
雉子笛と首よをる。猪の伏  
にこくとせぬ淫聲のきき  
深も志しうを備ふひく  
やはらふきりかたの月  
次乃乃の指と下をてと  
あ代家ああ新酒と志し  
るはらひひる。川乃竹垣  
干物の蓮うゆ。一し  
煮乃志らんく。志乃小俵  
吟也子獅子の片しを摺  
むしと志らんく。肥乃あ松

丁 備 丸 紀 兼 傍 青 後 丸 志 之 丁 先 舌 車 乃

芭蕉

初草やせむ自較ゆる秋の  
志きすしれみ湯を谷川  
壁かまう居村の勢地定て  
あしこむ月と草籠の蓋  
塩つきく焼く酒のそま  
持くこはとる。草代川  
道家ハ土持許をたつる  
所訪乃所海よはし  
舟高代草と年あく石の上  
登はらしとる。吟乃持子  
四つ折代備あき丸く  
あきうららし。吟乃志き  
月暮く西の陰やむ里  
ま稻乃傍く。ほめく刈土  
狗印しよ又記さるあふ  
春乃乃毒子をゆをるわ  
志きもの志きと目え  
細乃井備乃のぼる

水 史 年 嵐 益 乃 邦 乃 兼 乃 邦 乃 康 乃 邦 乃 益 乃

三十三

秀乃子た敬ゆははる 猿芝居  
のま口ちしを 伊丹 詔 白  
猿 城子 望 良 吾 此 表 如 人  
是 形 妙 際 川 阿 け 人 物 役  
已 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
嫁 入 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
袖 ぬ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
月 毛 傳 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
柳 赤 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
公 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
傘 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
見 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
出 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
千 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
手 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
談 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
人 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
房 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ

葉 邦 葉 水 葉 茶 邦 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

元禄五年 十二月廿日 即 貞 太 夫 氏

お家くは入 柳 事 梅 つまき  
隊 止 候 の ま 川 吾 乃 者 形 堂  
目 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
洞 織 入 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
夕 月 代 及 事 へ 事 へ 事 へ  
出 代 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
あ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
肩 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
足 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
下 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
つ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
む 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
現 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
取 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
三 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
ま 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ  
葉 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ

普 子 黃 山 柳 障 銀 杏 せ 晋 杏 山 鄰 普 堂 山 晋 堂

思わぬ香も友を秋の菴  
高き下りあを梅も第戸極  
山を代つるも此は志川をく  
ゆりうらうら合歡の下男  
とあふひ様る底の竹をまじ  
思ひぬあふ屋乃の秋後  
言ひきり昔何家の室うら  
集むるあふりしつてくも  
見ぬ振の重く金巻と志し  
あうてまふかくせりうら  
路しき甲の志しき智の月  
後をしぬるまひきき屋  
松茸波魚紅鮫うら海山不  
息才あ子ハ下くうら  
老うらハ山兼よりゆまが引  
あのみみくしここち楊枝  
付し一紙中くくくく椀の色  
ここのの影れまきこ法

吉山 忌山 晋山 郡 堂 晋 京 山 香 香 山 山 郡

元禄七年五月下旬洛参参り時 祝行

牛流止村のさきや又月西  
喜葉吹切る梅 檀乃を  
一枚乃延く置る押合を  
柄もこしきも上さしは  
月影の苞の生は萬のきり  
境りてと田の中乃  
象くいさふ舟東の乃  
月神も月又十五といふ  
秋も例をゆるしきふ裕う  
扇も 鴨乃あふ車やと  
抱きく松山ひろき  
あふ人しきり真しき  
あふよきあふちあふも  
坊をを礼を掃管乃蓋  
極書く終指所とあ  
各しきるるし世強  
るしあふふふ世の盛  
中をを推子のむし草の

吉山 忌山 晋山 郡 堂 晋 京 山 香 香 山 山 郡

川舟の湯屋もたふらまをいひ  
樽をきこく酒ゆる白を  
堂におほき舞場くさつ出らん  
舞付の雨のあましくなれば  
世はれ上りの旅の身は  
腰におきたる宿の音は  
昔昔いよその歌の音は  
ちりちり音はつらあま  
朝の月影くたふこふ  
分あなすよ恋を志く  
夢をまありしうけつく  
かけんをせするは  
あましく言ふ下海  
何をけりく第の  
吸物くせぬの客を  
把後乃お湯を又  
糸口くを見代車  
日くもまた

陽考作明珍美外書明  
陽考作明珍美外書明

いりいりあまの  
吾糸ほろくゆつ  
ぬとねの毎  
うれまゝと  
かゝらとす  
まゝとす  
さつとと  
夜の  
つと  
古向の  
終  
そ  
ふ  
ち  
月  
あ

世安支空土丹芽世芽考世芽終通

石塔と見えしとくを記しし  
宵木伸 する伴きり  
小工面子仲 同ふりてふり管  
まろしきちりてふりかき  
給事なほとささく  
訓) 海の何れちりてささく  
明月の餅 又あてし  
あし いかう ぼるあらしむら  
菅草又志し  
毎はくし 詩とと  
女房又只笑されぬ  
尻てれ 武士乃 耳  
土手 翁の  
田の 草時  
坂の 石す  
ほし 月と  
病ぬ せ  
やうし へ

元禄七年六月廿一日 大津市前番より 百歳子

菰の 芳 出ら ありき の 橋 式 之  
一つ 心 鶴 の 舞 々 藤 々 松 々 々  
まろしき 川 一 田 面 々 々  
魚乃 蒼 々 々 ため 々 々 月 村 鞞  
腕 揮 活 々 々 家 此 ころ 手 梅 市  
恙 乃 の 簾 此 中 の ち 乃 一 梅 額  
左 乃 の 小 福 字 花 々 々 々  
燈 灯 々 々 々 々 一 滝 の 音  
御 衣 羽 織 を す 々 々 一 白 々 々  
浦 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
古 々 々 名 傳 の 歌 々 々 々 々  
有 明 の 何 々 々 鴨 子 何 々 々 かい せ  
志 っ 々 々 々 々 々 青 山 の 社  
手 形 々 々 々 衣 を 袖 々 々 々 々 々  
瓶 子 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
杖 突 々 々 登 々 々 々 々 々 々 々 々  
片 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

式之 芭蕉 夢斗 村鞞 梅市 梅額 意斗 之百 額市 村之 百額

正三



春乃まき様お前と翁と  
翠簾此屏風を画く獅子  
面影は打かきたる扇  
扇乃後鳥居を志す  
けしくと翁乃若此鳥居  
群る雀の鼓くく  
紫雲の市此後酒買  
明日此種勝の月も  
稀事よ不備なるよ  
家よ清さやも  
子休る傳る  
千本此席よりみゆる  
物ある下知の急  
幕をとあけき  
鶴乃くくく  
畑亦あまを  
とつたの村也  
院よりはある 莖 一房

村 而 市 之 莖 穀 之 莖 而 村 之 斗 莖 標 村

元禄七年の月廿一日

本前考

考

秋ちくき心の高や 四  
志とらりふけら 梅子の  
月珠らおあまの火  
起ると海より  
飛うる丸雪み  
手のひらあひて  
夕食をとく  
何の言とを  
宿くく  
いしりく  
仏檀の  
標く  
八朝の  
赤荷乃  
西員  
坊家  
結那  
足袋

考 而 市 之 莖 穀 之 莖 而 村 之 斗 莖 標 村

年深ふちいさなやうな体をして  
傳止ぬまうと云ふものごと  
の焼の上より白く顔は交  
互なる黒色と云ふものごと  
半部より白く雨と云ふもの  
年の根をゆくものごと  
あつくと云ふ人の枇杷と云ふ  
ぬくと云ふものごと  
室の窓はむすこころ方々の  
まりまはるものごと  
髪はやくまある日此の月夜  
本より十さうの標をあるもの  
はばや中箱はまきかき  
桶も多しむすこころ  
投すをすつとく梅のゆあさ  
そつとくものをかき掃除日  
おつとくを摘むものごと  
はくもの肥も赤出れ岸

道 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出

伊豆の甲春奥  
とて成

種芋や芋のほろを賣出れ  
岩煙ふまけをゆかりなり  
酒好のくも結をなまきく  
ぬきくくまき草花ころもの  
有的の七ツ部なり 茶院  
いさここれと付添へたり  
秋風は枝の戸らる藤入り  
小俵のくまよにあらぬもの  
屋とくと矢部の川系を半後  
交々の抄子もいものごと  
手枕の男もまきく三心編組  
人よれはくくくまよに  
萱草のまよかりぬまき  
秋の月標乃幸死より  
月まきくを屋根も今風の者  
こぼれてまきかき瓶乃の  
葉の志のまよかりぬまき  
ねれつある水のかまき

道 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出 考 出



人心常陸乃武ハタシ久梨  
 春月すまも種きおまけ  
 うさるを過井は後守保  
 緋買あし隙きぬ  
 硝子に減除申於茶酒  
 樽喰ハむ  
 州むは麻所<sup>ハニカ</sup>竹俵  
 明石乃埴の太藪赤柳  
 大いハおれ一極ちるあ不  
 カコハ仙をぬ磔ハハハハ  
 けらふ<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>の善良ハ  
 散々々々ぬ忍海乃月  
 白いハ<sup>ハ</sup>ハハハハハハハハ  
 一も黽乃子胤おい  
 油物やぬ<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>瘦<sup>ハ</sup>  
 堂の荒<sup>ハ</sup>痛<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>り  
 下<sup>ハ</sup>ハハハハハハハハハハ

来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来

いさハハハハハハハハハハハハ  
 粉赤乃塩をりゆハハハハハハ  
 込乃子鶴江留を踏付<sup>ハ</sup>  
 かつのそり<sup>ハ</sup>一糸乃<sup>ハ</sup>折次  
 乃返を<sup>ハ</sup>金根<sup>ハ</sup>白乃<sup>ハ</sup>照村<sup>ハ</sup>時  
 妻<sup>ハ</sup>業<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>香<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>回<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ハハ  
 家<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>房<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>白<sup>ハ</sup>き  
 柳<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>髪  
 若<sup>ハ</sup>白<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>鞋<sup>ハ</sup>奉<sup>ハ</sup>  
 つ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>  
 鶴乃<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>赤<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>て  
 も<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>曲<sup>ハ</sup>端<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>俵  
 帳乃<sup>ハ</sup>校<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>糸<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>目  
 候<sup>ハ</sup>侍<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>屋<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>る  
 独<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>石<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>る  
 ね<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>糸<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>舞<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>宮<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>さ  
 都<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>遊<sup>ハ</sup>ぶ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る  
 凡<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>独<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>め

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

手鏡を御師の下へお祝ひ  
 名保一 加中屋元七加中屋  
 拾はもぬおた力をちり袋に  
 もんは解する馬の振鬘  
 夏川よ夏月の影を踏ち久  
 乃祖乃屋一 乃月を尺屋  
 赤恋ハふ束の芽を積ま  
 眉作らぬよかーの如み  
 大束乃細屋黒ふろー  
 救あく 救束を牛もあまし  
 冬此みちよこの一りを  
 初時多六七の松をついで  
 老り草鞋乃川ぬけや  
 約すきをの影の影を麻元  
 筆あー乃 猪乃 みる  
 書る六束をふふ(きせ)の山  
 春風吹く乃 若れ 細布  
 子 菜 道 子 菜 道 子 菜 道 子 菜 道 子 菜 道

元禄四年

とと

安くと出くみさよふ月の雪  
 舟をるくく 並れをを  
 初めきく 橋の影の影  
 獨こそけりる若れ七  
 雪ろくく 候ハある  
 峰ハ山と 中つら乃  
 赤恋よ 乃 正則  
 石れ 乃 楚江  
 勝重の 勝重  
 念作う 乃 草皆  
 梅子 乃 兔苓  
 徳と 乃 正秀  
 月影よ 乃 則  
 只ちりく 乃 皇氏  
 初こそき 乃 皇古  
 髪乃 乃 皇古  
 年く 乃 皇古  
 軌る車と 乃 皇古  
 成秀 洛通 大州 惟妙 格睡 正則 楚江 勝重 草皆 兔苓 正秀 則 皇氏 皇古 皇古 皇古

書れ葉乃下八夜と吹おろし  
 呼くるものゆらき夢をうり  
 正幸  
 有るまじつてみき内いまをきり  
 江  
 以てのゆりしゆりてあはれ  
 峯  
 汗まきくかきしををまき  
 香  
 ちんちんきりし煙管取らぬ  
 修  
 風やそし流る終の後し  
 魚  
 只一はとれむ藤らとの  
 魚  
 ちりしはまき初の葉あま  
 葉  
 月名をあまき初の葉あま  
 叶  
 秋風は細乃あまき初の葉  
 峯  
 西居る藤のまきし  
 魚  
 斤輪あり子なきまき初  
 魚  
 方ゆふあま力のそらかき  
 重成  
 長橋は館かりしゆと折碎き  
 柳  
 ぼろまにゆきし観るまき  
 あり  
 職人のあまき初をの法  
 法  
 南ありのうらめしきまき  
 香

世里八山と四回やそこり  
 文考

まるく細くまき初  
 清水  
 以てのまき初  
 白雲  
 ぼろまにゆきし観るまき  
 香  
 西居る藤のまきし  
 魚  
 斤輪あり子なきまき初  
 魚  
 方ゆふあま力のそらかき  
 重成  
 長橋は館かりしゆと折碎き  
 柳  
 ぼろまにゆきし観るまき  
 あり  
 職人のあまき初をの法  
 法  
 南ありのうらめしきまき  
 香  
 小地法のおまき初  
 扇車  
 終このまき初  
 以之  
 能くまき初  
 挑先  
 代後をり九世の観る  
 挑後  
 俺のまき初  
 首  
 あまき初  
 考  
 悠のまき初  
 考  
 切くまき初  
 考  
 寧神の困極まき初  
 丸  
 鶴入りまき初  
 車  
 花のまき初  
 之  
 まき初  
 柳

危くはと膝よけるをしがこゝろ  
襦子入り先を味重の曲抱  
よと虫と童よ草ととよとる  
あけの松を舟舟仕車  
御衣こゝ一隔りの代志をゆるぎ  
秋風をこゝ一長蛇乃裏  
そと畑のあきわきまをたけて  
山崎らのあきと衣くの月  
さぬくは意はるか因忘貝  
乞食とぬく支婦かこゝ  
こゝむらる脊中の雪と并掛ひ  
さけりる法を押出せり  
素ゆ一ツお寺又うけつて  
荷を履るの半八幡ころお  
あきと日向の方此景盛  
やゆきの糸いりる石  
急化すすめぬる様のみ  
又幾度乃保生目か度

道、先、後、吾、先、丸、道、后、車、之、后、先、の、雪、先、の、晴

中巻

けりくと帯を束る様  
作乃と月影を初ありて  
約月小鶴先く尾をよきし  
正乃先たる粒豆磨きき  
二ハ乃身より細小  
腰その糸は編まも  
腹なうの糸は  
空中の糸を徳か  
嫁入代  
杖と  
一  
新  
た  
昔  
立  
御  
ま  
何

惟、芳、意、惟、袋、道、惟、外、翠、芝、九、節、阜、袋、苞、菖、惟、雪、芝、芳、土、然、惟、然

遠き屋よき花雪しとか立替  
 下りひのりや子を巻る後  
 冬柱乃九子母あしを履  
 あましくはるを履風呂の漏  
 持鏡の一番所をうろうろ  
 何房きくともみちほろろ  
 青れ口入那るる乃夕市  
 桑の香のぬるあふ小茶権  
 間うあまそ又たいくる画の  
 やの中を——家々を板の枚  
 有咽まそ——画そそ、信と響  
 露——くあ——痛や<sup>イダ</sup>たり  
 川あそく、あそく——道秘の  
 独たおろろそらあふり  
 あそく——幾世るま付る貝の壳  
 山川くすたるのつづく船  
 片らくと京の波らるち子見  
 板よま——る土子のあま

袋 翠 粉 維 芝 芳 露 袋 豆 維 粉 花 芳 翠 芝 袋

え縁七の七月廿八日 猿 維

阿きくくさるへ海ゆく時ふけ  
 をせり——とあふ雲の穂 芭 道  
 約月取やよの影 透付そす 配 力  
 糸の輝るあ川暖簾の綴 望 翠  
 かしらうと揚をおろを 維 糸 土 芳  
 露所序さうは袴をるたり 卓 袋  
 婿甘意を小サキあまかや——  
 夕ぬ——と地下ととらるるお  
 焚飯のいつても中をつめてく  
 おりひ給るさねかぬくかろ  
 けはハあふ筆の要仕あひ  
 湖ありれ西月をそる寝し 昔 蘇  
 指指のこもりのあを扱ふ  
 お構——しあふくまると外  
 山陰と山ぬ——村の云と構  
 ぬるく——し新乃<sup>イダ</sup>の粟  
 焚き——く粟京中く庭のを  
 土うすけらうとまふれ紙筋

意 芳 袋 意 維 刀 昔 蘇 伊 芳 翠 維 露 袋



坪割ふ川際れる積あけく  
日たすくく風やう合子  
大名の仇のせきのをくまき  
むらしい乃かの歌る血る  
一井と代を極くまぬほの物  
ふひ乃乃こまふくさる  
ふりし草屋細子のおる  
融乃夢の極とこれん  
弟もたおあま生えそ  
干かひのさる三ヶ月  
神皇ハ神位を極く  
志ちしく存り体じ代士  
衣忌し旅をるを神  
かた一遠の罪の口を  
耳たふとろく極く  
かたふ乃乃るる雇六人  
大ぬをな積りある京の陰  
弟乃相よ此きむ二月

藤 力 聖 維 芳 意 命 聖 維 美 力 芳 聖 送 維 力 藤

色意

ちる葉乃因ふまきく  
お美ゆののを後と約 月  
冷くと朝の斤をとおのけく  
何くともさるよまめ  
小西まきにま太の落ハ輝く  
朝をとら月く玉くの旅  
あしめる神とあまをる  
神子くまを親の父代  
恒紙また月とくこのれを  
普法乃うらハ小をてを焚  
くくあま極くぬのさめす  
酒買くく唇子痛のすくわ  
まゆくと月のをうら松の露  
松は免いあう町宿の純  
と心やう涙く海る者翁  
彼岸乃めくは山くく  
まきハけりまを川奈たのお  
かうりう財の一あをく

ろの女 楓竹 留川 文考 惟給 酒堂 倉羅 何中 女 竹 川 考 生 中

魚沼と橋よなり橋を這入らば  
とやうらふよたわらと鳥の危柱  
あまくとまゝとたまの茎  
雲乃の区一たゆらなる内  
紫賣と隅乃子た連もも  
信義とつとたれとむ  
上下乃橋のたゆる川の香  
くく田の中と橋のたさく  
小まのくく不取と橋あま  
信の仕かしくなるも  
月教とつとつとつとつと  
杖一本必乃のつとつと  
登うくつとつとつとつと  
危乃らうくくつとつとつと  
備らさる獨乃あつとつと  
あぬまれ積くくつとつと  
田の水乃の連まらつとつと  
柳のさくくつとつとつと

竹川妻女考中女書中行中女書考

元禄二年七月廿五日

箱

ぬきくつとつとつとつと  
こくきかろつとつとつと  
月見とつとつとつとつと  
于ぬきくつとつとつと  
松風とつとつとつとつと  
響るつとつとつとつと  
月見とつとつとつとつと  
下戸つとつとつとつと  
むつとつとつとつとつと  
尾の地帯とつとつとつと  
入おつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
肌の衣とつとつとつと  
あみとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
あまつとつとつとつと  
世とつとつとつとつと  
あまつとつとつとつと

飲生  
曾良  
小枝

生枝箱良生枝箱良生枝箱

三十四

おもしろく虫の音のうねりかき  
むらさけ 鳥のつらき此御環  
あやふたのちの葉摘く里道よ  
離るる箱乃多毎川ぬらう  
蝶乃移や赤紙様は程せん  
けいとのとらう 桜ささうりさ  
寄る朱紅本要ふん角折く  
月鏡してらんより後月  
たのんし盗人の名に砂さ  
志うさきく川尻の舟抱  
柳社ハ櫻の美生のさく  
病の愈て空切らるる雪  
一ふに結びて人扶持の礼  
阿方うま嵐 秋の戸漆子  
徳しとふ心も様と改帳病て  
うみ切らるる秋まははさし  
入山のいさよは落しとる洞  
まねと解しとる猪の足経  
岩よりは流るる持し徳可

生 校 良 生 箱 良 校 箱 生 校 良 生 箱 良 校 箱 生 校 良

甲の巻の中かかたれとの  
追剥の石とれし秋のれ  
月と紀外乞舎の樂  
まよふ葉ふ其まをうり  
翠簾二人かたる物あし  
新されてあし柳しとる徳れ  
行きて手遠ま砂る胡成  
回丸の門も不このうら  
離りては 都志つげな  
長生に 阿文君の身原を  
結う結いのやねとる  
しら花の万文海の町や  
酒よいさある箱の山吹

生 箱 良 校 箱 生 校 良 生 箱 良 校 箱 生 校 良

思ひま本常や四月の梅物  
糸の杖つゝ岨の夏むき  
牛のよの乳を春日飲家とそ  
かきふくし海竹のあこ桐  
休つゝも糸の結く細腰  
ひとくもをさるる明の松  
為雪の渡の身は浮葉て  
野秋の信よが花とさう  
うね低は洞をつむめあ  
あけけの糸ふ上の袍く  
常らつ葉まの星戸は真子  
よせつ車のさし侍く

東菴 桂掛 叩端 桐葉 工山 菴 閑水 榭 水

様へと糸をよきまの電

盃さむく 楓飲り

有る子陸北本城を新勢

あふぬき 庵の砂束

小法門は約引むあれ

椎乃古枝と梅を折る

いちこ念山より村の面影

老多 夕乃 菅

お喰くく重麻ちち物と

けつこみきく車返

橙や電よとと摘る山の妙

平ふれ 葉人の為

接作のあも海 手まの風

三日月ゆく節句知る

鶴と入る 秋川は花陰

美流侍乃志すう魚の

仰即信小 緒白髪と梅子

枯く常盤入る 百中の竹

葉 菴 水 榭 閑 菴 工 桐 叩 桂 東

お喰くく重麻ちち物と



元禄五年 秋

とらぬ程まわらぬ時よるのぬ  
光とく川音もあはれはげれぬ  
つゆの仕事いそがしおきかて  
垣中のあまをけしきりし  
おつらく弓射もあはれはげれぬ  
山雀もをてけりし坊をけりし  
秋風も福もあはれはげれぬ  
とらぬ程まわらぬ時よるのぬ  
念仏乃く念のあはれはげれぬ  
別れしとつめさし袖あはれはげれぬ  
おきかてあはれはげれぬ  
夏はあはれはげれぬ  
秋はあはれはげれぬ  
冬はあはれはげれぬ  
春はあはれはげれぬ

元禄五年

秋

草薙もあはれはげれぬ  
吹上りあはれはげれぬ  
七耀山をわたりし月  
所化もあはれはげれぬ  
坊をわたりし月  
土はあはれはげれぬ  
生蓮もあはれはげれぬ  
日よるのあはれはげれぬ  
とらぬ程まわらぬ時よるのぬ  
念仏乃く念のあはれはげれぬ  
別れしとつめさし袖あはれはげれぬ  
おきかてあはれはげれぬ  
夏はあはれはげれぬ  
秋はあはれはげれぬ  
冬はあはれはげれぬ  
春はあはれはげれぬ

下五

刀乃ささ毛子の子の足纏ひきき  
 和泉代わりの桶入の名よれ  
 紫垣乃古きま吉の破ぬきり  
 傍もまんこり推いこり  
 〇身代思つてつるも秋の風  
 驚切泉者の月そひかく  
 長つより西の影乃移るひく  
 彌りし由子ハ何と答へる  
 空垂を乃後の水ぬ梅枝  
 言より勅置しつみくろる  
 やとらやんたらの岸ハ新巻  
 削る魚つり伏巻のふく  
 山澤及も先洞ハぬ舎のゆは  
 祢宜ら被りし袴もうんはく  
 女毛 籠も物やありあん  
 只こいしくゆ 田を踏返る英  
 大身他より二白き  
 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪

夕照

法荷

崎崎乃海を抱ゆる雷く春  
 漱 蔭くれ 芦の穂代上 芭蕉  
 雲の糸種を隔も松とみり 露沾  
 響りはさする石系乃響 荷  
 八月此為他括る雲をひくろ 菰  
 葉の分よまををあやとれ 法  
 山ちとるまも 梳のさほくろ 荷  
 志しとみあやと 石送るト 菰  
 夕雲月よまをぬり 鞠の着 法  
 白き如様のの地を庭越ま 荷  
 絡まをを様のの極よまらうひく 菰  
 乱まし一髪とをまらうん市 法  
 潤る身形んの数多も 出云 菰  
 何え雲のよまを 法 菰  
 梅の月一のまを 法 菰  
 法つき初一東のまふく 法 菰  
 みくつて代已く 法 菰  
 四十産る 法 菰

下中

独子

江戸橋をさしつゝこれ  
 薩摩乃若くしつる月 邑並  
 圓路ひくくり磯洲を 炭香  
 群ぐらん此肩よりけく 其角  
 夕の如く代りあつた冬香  
 杉松苗枚探乃幸夢  
 池の橋渡し姫ぬ垣踏く  
 之れと入帆乃若く層根城  
 世の中を馬ののろる葉の煙  
 姊の如く代りつやさき  
 かみさつ袋の切のそ月くみ  
 多を占さく 園の物也  
 二番とあつ乃けく 侍  
 一差乃連身をとむけり  
 苗代もゆる 雨こそあつ  
 雪の葉れつる世もあつて  
 糸 直下りつる世の夕月

子 差 香 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼

子菴 橋 在 人 酒 子

名月や篠乃雨の情を侍  
 客もさつるの雨ぬ虫の音 翁  
 秋を待つる庭も定る石乃色 千川  
 まつたぬる水の酒代試 源紫  
 踏きつぬ鼻骨おきく懐み 山翁  
 飲うきたん坂乃下よる 翁  
 彌人の老をのまよと振く  
 まつた雨より雪のちりめく  
 への乃強氣をさるむぬり  
 さつるひ雪の折板をさく  
 舟乗りせそくおりて夕香  
 煙よよんこなき波ひ 惟子  
 依らんさくけりも 豆袋の存ぬ  
 食乃ほきを喰たより 秋  
 月教は言及ると思ふ馬帽子髪  
 履の舞乃ぬりひつる 香  
 おほんはあつた車いさつて  
 ほろつをさるぬ香の南風

翁 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼 子 香 兼



元禄三年九月三日 藤原の秋 不知

聖徳太子 橘の種を橘の  
山よりつくりて見せ 秋の高 荊口  
初月やす月 西宮をとりて 翁  
波の音すくくもあけり 如行  
本をひやく 橘の種を橘の  
酒の肴はあまを不 一 凡 左押  
おのつり 藤の根をちりて 斜花  
るたきあやふあつて 武士 如  
いそぎ 一人の文をく 如  
登るの面を 面影はなく 如  
侍者の種を やまを思ひ 如  
葉多川ぬ。 月乃十 柳  
層島 一 橘の種を 如  
綱代の種を 希ふむるも 如  
舟の根を ちりて 如  
上 藤の種を 如  
石のあや谷の 及 如  
飲く 一 橘の種を 如

みれおめ二兄の七ふこをの事 為

藤井 一 橘の種を 如  
綱賣 依れ 小口を 如  
村乃 地を 小口を 如  
めつ 一 橘の種を 如  
葉と 一 橘の種を 如  
葉と 一 橘の種を 如  
立 一 橘の種を 如  
三 橘の種を 如  
よ 一 橘の種を 如  
葉 一 橘の種を 如  
指 一 橘の種を 如  
物 一 橘の種を 如  
侍 一 橘の種を 如  
お 一 橘の種を 如  
羊 一 橘の種を 如  
法 一 橘の種を 如

蝶鳴名乃あうふ舟家く  
 現をわしく白乃きくさ  
 髪そけい必有うさげの言  
 花をけうううさ子さたさ  
 男の妹さすうとさあき  
 かなく大桶よ舟中をほと  
 老ゆきを針乃舟中をほと  
 子風う舟のさううささや  
 舟う舟よ舟中をほとさ  
 ぬささすうさく枝さあー  
 甲斐伝流舟をあうさうほ  
 つまをけさささくのあち初越

土 波 石 池 舟 又 舟 色 葉 坡 舟 舟

右馬仙よ六白子

本枯より老る舟運さう入湯乳  
 毛をひく鴨とよる廻板 酒壺  
 掛乞の中総良々袴さく 為  
 さうらうくい本履さくう 山前  
 梨の枝おらうと解とさうの月 大舟  
 桶ふるさこさう草かうのあく 千川  
 秋風よ髪さうゆり 舟の宿 千川  
 藤のりうれ葉入り 舟  
 六月の日は雲さうの舟の木 舟  
 舟殿乃入舟船ゆりさう 舟  
 笠雲舟さう供さう舟中 舟  
 雲西乃舟の雲さう山 舟  
 翁さうのさうおと上は藤の庭 舟  
 俵よ豆乃舟船とさく秋 舟  
 月代もさうさ里の離さ色 舟  
 手籠ひさうさ代吸さう 舟  
 五八さうさうさぬさ心盛 舟  
 舟れさうの舟さあさう 舟

月とらちをいそぐやみづ村時雨  
 小雲のかしこ柳のたけ山  
 男麻飛雲のまき万葉柱く  
 のまの白くし海よある川  
 泊るまの藤乃板や七一里経  
 樽よおしこむたよひの餐  
 あせくあせくさむ日多る月雨  
 友際うろし一葉乞乃花  
 蓋よぬあ髪ゆらむ手離け  
 るこころえまよいさむ大酒  
 高籠ハ手穿髪よ威ふらう  
 の凡台らる音の傳おし  
 ぬくさ葉おれか一方まにさ籍  
 傾きやこ乃あさむあ  
 伊豆乃海海清よ舟を傳令  
 云と度乃法し一葉を定し

才女仙二句ふり

秋後五白津り

まき取

文月や六日七言代歌六句  
 霧をのきこ家相乃一葉  
 物霧小食禁方烟立かこ  
 夢の小舟をとせよる板  
 鳥啼むく小山とをき山多  
 松乃乃るよし架後く杖錢  
 夕嵐庭吹拂よるのちや  
 多しひらきまきくあつらひの  
 思ひうけぬ真を傳ふる一  
 きぬく此場小都も志了ま  
 ぬくの恨る雨の指つきて  
 鏡より楊のあけしひ私  
 的なる水朝をい月のま房く  
 藤門くあら女のみくはよ  
 石打まはけくあぬま衣  
 多川くあさうの山本の菴  
 雲の泣甚候ふくまをまよ  
 蝶乃羽をむ懺悔の糸

右栗 眠鴻 此竹 布囊 右雲 栗 良 栗 菴 年 栗 臨 雲 年 言

下五

香雨と髪利児うまみこま  
香の色くま人くけ文 良 蒸  
是とちやくあえきま

お前一所りく 右字

星の青柳の駒牽く為後  
色香かゝる初刈り爪 色良  
片り一石踊る急く布つて 色蒸

叶方十句キレテシス

秋風了る父り 孫 立  
かのそと錦を白拾之下  
絶て継をるる必乃古堂  
稚桂く小枝よ志の名を片  
雨乃あうまの月と古堂  
黄を引雪車もあうま雪の上  
一むしかゝる人馴く飛ぶ  
金山徳う小砂を拾ふらん  
料のむしと雪陰の滝

曇るの村百その名を降る  
人字一とと一の石家  
松柏長く嵐の音をたたり  
子と射させり 鶴乃床  
傾け忘れ袂をぬり 歌の  
従古乃月少し 台多し  
捨皮むく老の尻乃 杖をく  
志く連く雪の海を半於全  
塩濱の詠村乃 烟を瑞の  
法あま波のま片し 文  
かゝるさし 地蔵の橋を名  
藤鷹有し 里乃 素外  
後と下ちり 片との物陰  
他借を尋く 子乃 雪の今  
あふ成 石まく 梅の老生

懐傍松原堅房之電良蒸  
全石半骨玉持



赤く目の西まなもつら切目樹 イニ  
 おもたれ子ぬやのあひ物言 イニ  
 のうねやまのくまめたのま イニ  
 第積るりま松の密に イニ  
 雲布の積るぬしむ老の守 イニ  
 ちあぬ口初をてるまやのま イニ  
 苦りさうちをこを返る言焼菘 イニ  
 すまきの陰まなつたま イニ  
 むけるまや月ふ宮を イニ  
 琵琶乃のつまを イニ  
 只の切流さう洞つま イニ  
 白いおりの紙志よほ イニ  
 ちあ仙まふ石 イニ

虎 芝 荜 虎 荜 荜 荜 荜 荜

元禄六年 元禄六年  
 色道菘奥切 色道菘奥切  
 荜 荜

勢あや物豫のうら白の傍 野  
 挽く膏ゆくとし大根 野  
 夏冬ハハおく松を 野  
 門の白おと月のま 野  
 そゆきも枯の目辨のし 野  
 十一管ハ栗此清 野  
 七十ふらる紙帳 野  
 三尺ま 野  
 此ハハ田のお 野  
 堀きら半の耙 野  
 暑はよ吉乃男 野  
 その日 野  
 押流る 野  
 尾ま尾 野  
 田の中 野  
 芝 野  
 木の耐 野  
 俵 野

荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜 荜

唐冠を青けり時澤を門首に  
遠ぶる子乃もまに居所  
裏合を板敷のくまの菖の岸  
坂乃花をとりて母の木の  
手家くまは是輕の遊りし  
ほく酒のそふあ乃あ  
とくくこ極よ風のあふる者  
稲笠人れ徳をあらや家  
月見のハ親よふきのあふふ  
とほきく家ハとこ「ゆんる  
伍り判らあま斗ハ勝  
仕付くくもと氏 舞方の客  
回張極の向をい乃稲のあふ  
とふくし舞一青の林唱  
右牙仙は四白と見

坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂

水多や小船のいまじ二役ぬ  
柳をまきく岸乃かり株  
兄しまらる切舟乃萌あ  
力の極くくく 伏龍 利手  
食傷の腹を平く朝の月  
登海く揺さ盆乃友在  
小構くくをま程入れ如  
被一文く下張と信る  
落筋乃立の思きも時く  
糸の未ハ殿の 敷 能 単 良  
あつはりの子依り今  
古きを解りくくを鏡と物  
小さくして場所を歩り果の物  
蚕を織く推う喰ひ初  
月影の向も仙の甚坐之  
盗人くく昔の 伊 道  
皆掛の端木のかよ花の  
くや 師 今 今 遊 打 細

坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂

湖風

下

け乃舟の人の形一ふ秋の糸

廻乃舟の糸よりかゝる葛

月を心考妻のこゝろよき春の舞

ちいさき糸をゆきあふ波

と糸お羽織をへて花うへ

洒くゆきみのやまの夜癖

河流の男節白の序意立勢

嬉乃玉信よりあふ梅ちち

線多と春の意言のゆきなり

急流次乃條代跡る三月

兵乃布止る糸の袖より水音

かくさよ草よりある松風

とくくと山田の稲はまき

地蔵乃埋冢結へ懸一交

仕るなき身ハ糸あうる釣の月

塩飽乃糸のさ川と入こむ

吾ぞ暮乃芝川吹まき

川側見ぬき醫者のこゝろ

泥足

交考

遊力

之乃

車庸

洒壺

唯吟

龍柳

足

庸

考

乃

止

乃

乃

乃

をば張

白髪ぬく林のりやまきく

入月とまきく西巻乃月

あま塩乃繩あつる秋の草

刈持らへるかつみ乃紫

河風より竹の衣のかしこ

麦のこし糸をうく冬夜

舟とくく一羽帰ら繩より

願は我ら意舞の糸

そ織の帯あつる糸とめ

久し手銀のあるあまき

山を草の時の唄る初鬼

かちと谷より踊福を

月影よ夏の足毛を垂掛て

細と縷をふとまきく

そのくくお織のまきく

人もはきく糸あつる

時くくふとえはあふ

昼茶とくくさる花あふ

之道

珠碩

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃



杖の杖とちちるしとふ所は  
 月まのほらちん才よま  
 西の山よりなるとりれ  
 いとち牛のちと動くち  
 男の名まんまや野ん吉  
 小社とわけてわゆる大  
 使やる所とまると折ね  
 整てと医者とのえとま  
 拭いしとちのねま  
 ちとちちちちちちち  
 丸よりまままままま  
 ままままままままま  
 無のまねね八宿ちん  
 雨まの月のおま川すち  
 大まままままままま  
 七棒ままままままま  
 又ままのままままま  
 小鼓まままままま

車庸 酒屋 遊刀 漁川 情也 支若 魚 産 考 我 席 孫 力 産 竹

おの

ちちちちちちちちち  
 一羽別りち 千鳥 一群  
 枯るまのちちちちち  
 田中乃乃乃乃乃乃乃  
 月海く巴くあまをち  
 秋風上流門のけい  
 露の糸線とちちちち  
 柳ふちちちちちち  
 藤乃乃乃乃乃乃乃  
 傾城くけとかくち

ま成 ち良 依之 泥首 水萍 風泉 夕氣 苔翠 瓶筆

松松よまのちあまのち

鏡ありちちちちち  
 ちちちちちちちちち  
 なちのちちちちちち

吟情を記し踊の月も秋く  
傍までお〜〜とてつゆ  
細細千場と女高の籠子  
編笠能く入る何ゆ  
祇明の草も秋ひとひらき  
と言ふれと地中もあや

那末六良印

おき書

如風

秋〜〜や高松の比乃高松  
剛士乃、薪と手折冬、梅  
市車代暫とやまの香くも  
秋を秋〜〜の夕月  
矢中代夢ほうとて秋の風  
か〜〜乃とて交こて秋後庭  
言仙あり里とあり

おき書

知足

梵飯や伊良古の香も秋  
妙さ覚〜〜秋足の秋  
秋〜〜乃かみ君か子  
秋〜〜乃帽子乃ぬき  
秋〜〜乃あるぬ暖さ  
秋〜〜かくとて秋後庭の月  
人

おき書

竹弓

幾高松その秋神とわらふ  
秋〜〜乃秋とてんさあ  
秋〜〜乃月若小高松  
里乃踊〜〜とて秋菊折々  
野水

寂思菴小橋

秋人

五葉やは〜〜不様とて  
雪と〜〜とて秋の松  
春の子〜〜とて秋の松  
春〜〜とて秋の松  
か〜〜とて秋の松  
若麦乃首とて秋の松

下

あられしき花や精し金なり 如行  
ねれ文よりまけ 竹さゆらまき 夕道  
おろしき振とまき ぬく磯原より 荷子  
ゆのゆやまきとまき ぬく磯原より 野水  
はらうて山よりまき ぬく磯原より 色道  
清つく杖の階子ほく 手

賀新宅

終夜や雀ふらふ春戸の秋  
蕭々しき心や 望み兼刈り 知足  
おぼしき足乃 編橋書こめて 安信  
風呂替より 月乃 曙 兼  
松垣のあやみすこふ鳩の色 足  
と川お下りまき 舟子揃つ 信

羽道

いふえよと寝面うしと おあはれ  
信乃より あうれ 枯糸乃 松乃

本職州下 若小橋と 茶客して 重五  
松心より まき 舟乃と 舟乃 杜必  
船小橋 かけん 月色海 舟  
ひらう小橋とすうれ 岐阜山 笠水

そ達の色よりぬきまき 兼  
おろしき入目乃とまき 兼  
付く 風保

赤川と 葦原く 燈と 燈ふり  
春乃 如小橋のあ 何と 兼  
初寅のそ ぬき 舟乃と 舟乃 舟乃  
約こく月乃とまき 舟乃のそ 兼  
牛車 つまきまき 舟乃のそ 兼

お新屋

旭里

雨降く 粟乃とまき 兼  
心川まき乃 舟乃とまき 兼  
夕食より 舟乃とまき 兼  
秋来より まきとまき 兼

寺島長助市子 七五八

啼しきや海よ入るる宮上川  
月夜ゆをなほ波のうき海松 合道  
黒鷲の飛り居るの空のゆく不玉  
帯と雨よるらん雲とこれ 定連  
橋より乃朽敷他里を夜半良  
影しきまうけの宵月乃油火 任曉  
ふ橋姫乃をよきま 恋衣 扇風

羽鳥しき 舎瓦

つとねはよむ世は輝ゆく出香  
秋の志事まをくすま 三日月 芭蕉  
波傳ひの風のうをあつて 不玉  
ひくく終るるのあー 秋 芭蕉

秋後高田細川床菴亭

みま 七五八

茅渚よいつきの夜とあまの  
秋乃まをくをあまのけの月 棟宇  
秋もあまの夕影と秋のいきて 馬也  
高きあまのー 高敷のト 芭蕉

七五八

小瀬は生柳 或 や海士ま  
わくくかまの 仲乃乃あまら。  
三日月のまのあまの秋のまをく 七春  
ひそげと菊のよあつとあまの 七江  
服屋ー 羽織はあまの秋のあまの 七枝  
橋乃四方をめぐるをあまの 牧童

七五八

茅渚よいつきの夜とあまの  
白乃あまのくかまの 七色道  
橋乃あまのけのあまの 七末  
人のあまのけのあまの 七  
高のよに度龍脚のあまの 七別

元禄三年壬申書

七五八

土の中をひらきし社

かきうし免

其角

小傾破りてく存中りての書  
 次中よりまふ板乃あき物漢心  
 常はく止傍の却の希として 色意  
 かせんこころまらうー 色暮松  
 義登をひそく小浮く市の中 盤子  
 以川をり中を初師の外は 史邦  
 升菽乃慈こーま華月の家 玄来  
 胎はうー きた早橋の朝風 丈州

元禄七甲戌年

第且快

其角

よし川や中の破ハ星月夜  
 手紅毒をまゝせ 必氏の夕我  
 春も香葉道乃まおゆくあし 岩翁  
 山よりんさる ゆあ辰の所 松風  
 独あゝ方とあそえさく 吹子川 影棠  
 改原星 葉がけ 秋よ故う 横元

之ゆまはくさき 籍乃きつえの 色意  
 帆張ハ合うー 秋の夜 仙化

為

待買くおあうさる月見丸  
 秋のあー 小善翁のまじ 唯止  
 あけるる聖八洲は花咲く 惟吟  
 以川をのくあふこのむ中 報 西生  
 以れまをうさお用とま 絲 支考  
 榎の枝とあらー 色あう 之道  
 清川よつあま登を 色あう 青流  
 大乃さる川を 色あう 為

色意

山はまき 鞋すらん 笠一くれ  
 むくさうしー 色あう 坊 桐紫  
 本くー 色あう 色あう 色あう 東友  
 まはくー 色あう 色あう 色あう 叶傍  
 細うさー 色あう 色あう 色あう 如行

下巻六

くれていさよしきるわさる工山

夢幻仕巻をわてと成り

越さまの時より目まで 色は

あはれや白き障子のまじり  
炭の火をくくしやこれまほ  
青の月をよとほふよりあま  
けろくと叫ぶあふろれ  
わろしと解さうはもつらおほい  
形替利てみちうひより  
猿の意やうをさす雨をれ  
ま〜〜〜〜〜  
物くらすねにわ〜〜〜  
わまねぬやうよそれまう  
蒼天とどろろ〜〜  
対面して次〜〜

移人 支考 湖水 弁三 柘林 三碎 野函 利雨 越人 相葉 修若 枕草

夢想之能諧 能書

捧りし二月中旬より山花子

乙下のおくけあまや  
雨裏む古藤ひらく流る  
志強き満ちる香をあゆ  
雲よりよりあふ鳥のわだ  
谷乃戸より〜〜 看板  
上〜吉右衛門の平〜  
お里乃〜〜と金箱の裏

杉凡 仙凡 龜 惣代 杉凡 而已 觀筆

貞享四丁卯年

筆白

時雨〜〜〜  
火燈〜〜  
松風〜〜  
朝霧〜〜  
袴ひ〜〜  
昔れ〜〜  
後子〜〜

色甚 漢石 口痔 其角 トチ 志宮

傍ニツナぬえかゝるの帯  
吾等の土境よ子の目代松いし  
後々ぬゝゝゝゝ務あるま  
石 道 白

葉柄と雲しつ時、又まゝ後信也  
芭蕉

武士の大柄うゝきけりしれ  
一とけりり本ゝゝゝゝれが  
分まゝゝ樹にぬ紙を団きて  
大ゝゝゝゝゝ古且ぬれうら  
おの葉乃すゝゝゝゝて月のを  
後々ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
州 座 翁

叙外

本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
に日お日れゝゝゝゝ月  
何取まゝゝゝゝゝの月影ほゝ寸木  
あゝお何ゝゝゝゝゝゝ友 芭蕉  
えいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
馬けゝゝゝゝ日つ文又楽なる 越人

憶と明てゝゝゝゝ山らくゝ  
蝶ねいゝゝ 揮子れ 亦 杖芽

芭蕉

残衣のやゝゝゝゝゝゝゝゝ  
下ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
板をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
夕ゝゝゝの月ゝゝゝ傘とておく 夜中  
馬ゝゝ 西山と付てゆく 昌吾

け未翁のうとゝゝゝゝ余ハのゝ

旅あれきてまねハキ投く  
舟中めわゝゝ行社ととく 芭蕉

夕ゝゝゝ智翁を借き百人  
今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
日毎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

下六

今年も梅の木の影  
春して花もよみ月とこつ 色差

月があけきりたすけは  
ハワリとまよ子の影ほそく 色差

いさよりのまよとさう入るまで  
石のあつらふほれおれ 色差

杉の葉の結しぬ言文信 想風  
二十余年 まよれ息をとり 野人

あけ山のりくく月のみちやら 支考  
故をつるまほとやうけけ 胡江

いさよれまよとむけくやまほ子 詩六

うられてほれまよとくまほる 云  
梅福のまよとほくとくまほる 吟通

色差

市よまよとむけくやまほ子  
酒乃戸あく轍のえれ 梅抱月  
物息のまよと月母をいづて 杜因

色差

花乃屋のまよとむけくやまほ子  
おてや梅のまよとむけくやまほ子  
七夕は六日八日のまよとむけくやまほ子

色差

百城のまよとむけくやまほ子  
本代花のまよとむけくやまほ子  
けいけいと梅福のまよとむけくやまほ子



木かゝるを凡しとてゆゆ 東夏

如春

梅は冬の日影さく入る日  
花のうらみ 此等の聲素はく 色道  
葉の中を焚の文乃並ひて

赤き

其田志や 五月晦日二里の旅  
かゝるの角豆を 其のうらみ 赤  
雪の代子乃き 蒼の凡のかゝるて 色道

素堂

深きぬ 翠や 作らむ 蜀の友  
葱乃 苗吹く 秋を 代を 爲  
新もつく 蓋の 月影の ありて 佐圃

古の世の古きを 渡りて 爲  
月やその 津木代 日乃 志を 爲

旅く なるを 村く 乃 乃 乃 乃 乃  
ありて 文の 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

秋風

あきく 新割 枇杷の 産地  
竹く 山乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
日の 雲 夜 雨 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

写しおきて 古きを 爲りて 爲  
西か 一 香も なるん 乃 乃 乃 乃

水とく ありて 田井の 古き 自笑  
舟 岸の 三股 萩の 乃 乃 乃 乃 乃 乃

由緒 自筆 又 有る 主人

樹をよつ 中は 宿の 友を 爲  
秋を なる 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
月乃 なる 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

貞亨丁卯仲秋末五日

世に口之圃にハツ母はよ力多  
ある人なり或は是をよくいふと  
平は寺ハ其の昔とては本義なり  
然して他号と改め古語と云ふ

雖もして名をよと名のよをよれ  
字性乃きくくくくくくくくく  
當れ在ハひひひひひひひひひ

作そのそをよをよをよをよをよ  
その他一をよをよをよをよをよ  
よくよをよをよをよをよをよ  
ゆるゆめよをよをよをよをよ  
らき休りたりと

曾良

藤衣早苗又清くぞ會くらん  
海もれ港あや若れく書き色意  
交りのも川のききききききき

あま里

新やんは又のひきくちと草  
市乃子代のきくく細布をよ  
日而りきと善き清くく 色意

西流きくく

とをよ

あれ勢も空をよるやれが外  
空白くくははははははははは  
何れも目的の妻をよ嬌啼くく

善信亭と

とをよ

風のきくく南は道くく上川  
小家れ新と流のゆめくく柳風  
知もれく帯ハ霧をよ理きて本端

酒並

よをよのきくく松乃志多ん  
徳くくきくく琵琶のこりし  
宵の月よく輝く空をよきくく

素並

色並

き蜀北隣とありや甘大根  
冬は——菘りや窓の標芭蕉  
月とるふ花うららと連々味 熊菓

とま

うしは世のわ乃山さく  
香清のこゑ 細根大根 夕空  
人足乃玉雲うそゆら雲ゆり 玄米

か手置

色友

中々もや書ゆく有の言新  
有くはる宮乃う家か 井山店  
杖持方た——系ねまく厚うて史邦

世身伝るを依の白きく下下思と

聖園

いさこは書りし由り花のれ  
冬乃の中のみふのまなつ——聖 治園  
大根のて——旁まふ——くゆ 色友

世身伝るを依の白きく下下思と

松風

雪の松おれ口名とと程き——  
日乃お家まへの赤ふ冬危 孤屋  
下着と一糸ほく打あけく 色友

仲春初之夢想

申

為弟竜乃いひきよ麻の毛  
神乃免そこ小まへに秋 風 某申  
昼の夜とる花はほき月おく 色友  
世とつ物とま然り手是あり

梅うまや通すすたれをうの書  
土とら融——をき雀 鶴 家  
陽をよ聖の午に花積り 色

二羽

麦時てささ原志や畠村  
みとらりりり 松咲き 起人

登つて登かひ大の森通つて野に

くま川

百多や杉の本はちよといろこ子  
第と杖のうら山公家信化  
隣ういといと離の解きて去来

芭蕉

湖水くく是り新くく比石の音

浪よまうきていにく取人文字

空うらや友うくくく又うて 伴六

其角

春唄し地ハ聲きくくわくく

あきききききかけくくく

出代のあきききききききききき

芭蕉

外うむくく母うまきり冷きり

香ききききききききききききき

いろくくれきききききききききき

其角

芭蕉

枯枝くく鳥のきききききききき

秋くくききききききききききき

峯山

師の機むくく格乙本代葉

きききききききききききききき

知足

夏草くく東海まくとく水三日

きききききききききききききき

李下

芭蕉野の其白草野草

月くくみらを酒くくく會芭蕉

芭蕉

古池や橋ききききききききき

芦れくくきききききききききき

香枝

宿舎くくきききききききききき

くくきききききききききききき

其角

あもなきは梅の葉の影  
葉の陽は影の影に似て  
色直

色直

ふらふらと二粒あやめ  
らんゆやく買より秋の月  
色直

是れ秋の文事なり 本因

秋のふらふらと二粒あやめ

秋のふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

色直

如舟

やうふらふらと二粒あやめ

田舎のふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

色直

月直と支のふらふらと二粒あやめ

狂のふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

色直

あもなきは梅の葉の影

あもなきは梅の葉の影  
色直

色直

物まきとあやめと二粒あやめ

つらふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

秋のふらふらと二粒あやめ

あもなきは梅の葉の影  
色直

勝延

花のふらふらと二粒あやめ

秋のふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

時直とあやめと二粒あやめ

宿のふらふらと二粒あやめ  
色直

色直

あもなきは梅の葉の影

あもなきは梅の葉の影  
色直

尼とてをなすをたらざる影の如  
きの色をたはすはたし又顔色甚

本因

終はるは終るそれよみわく事  
なれつゝなごくはと法と

香川

勇虎とあつてくまの指外

小春よりそげうこくみの虫色甚

とを

毎やとら候や海くあむかり

一柳志川もらはまごの雲ま由

本傳

吾國や麦の中りあれ者

う多候あまをあの名口色甚

乙別

その戸や日暮したが一葉の酒

梅子よりなまはるの梅の月色甚

とを

月代やひさしをさす月の宿

萩志しあつてむしをど燈正秀

曲家

葉種千んむしらの燈や夕奈

管無り 葉物乃色 色甚

珠項

いりくの若さむつうや春の草

う多候くはる乃若及覚ゆる 色甚

世言伝とてはのむきな男 色甚

あけるくは林葉をたふる

角のさうり力牛もあつての土芳

珠碩

画賛

赤んくつ一はのほ穢極  
かりしあつてい公家の振着色甚

とを伝とては某一の女

まゆとては會とてはめ

かゝるはるはれとては

最の白はく

山中宿りしころを思ふ

香芝

折くや雨声は山雲のこゑ

梅をみたりやぬねむり 色道

色道

笠寺や中へ芳客も春の雨

傍を流るる水とわしの曉曉 知足

色道

櫻木のあふもを思ふはつて外

あはるををををををををを 秋風

心地あはれ起例入るの事をも

色道

くまうむむむむむむむむむむ

むむむむむむむむむむむむむ 起例

色道

梅色しきぬや露をぬきまじり

杉葉しきぬや露をぬきまじり 一つ秋風

如行、旧昔は時時早し時 如行

まねまねは時よはぬやと思ふ

古人のふりやぬれさす 公羽

貞事のけしき熱田の社に侍り

非ずの系系を体へ 色道

まのくまをぬて餅を今もぬ

まのくまをぬて餅を今もぬ 桐葉

孫子の終へ越えらるるを思ふ

杉をまよとよむられやうられ 桐葉

稲一つのみ 足けみやく 色道

湯居うらなぬあはれしる井

夏ぬきし襟あはれしるおきひ

いのとあはれし甲斐を思ふ 公羽

御堂ありく猫乃言白  
人あしぬ中とさ煙まきる客  
師を乃日救れら指と外

鐘つくく今と終し古寺  
旭ふけ小松よ雪の跡ありく

村乃出店より集く藤糸  
嫁ともし女とくく指とあり

暖くく湯の蒸騰はひらけ  
去らしりんく函と茶筵

地乃と名うほとくく所階か  
皆のこけ中うきく一羽鶴

佐々くく中と市乃ありく

大和路へ入日く中とあり

屋敷のまをからり故之  
まけくく庭ハ橋の趣あり

舟橋くく山つきのま  
大根と細根をなす秋実

庭よりくく火あてりたさう小  
く秘女良を玉るおひさの

枯くくみくく髪のはげ  
路色はふくく其陰の位

龜山やありの山や付山や  
らくく碑やあしり

雲乃り八まう山の月言く



芋塚返戻 小男麻の角

皇命く晴しくさかひ川に  
及くえ多れ小伴如よ

其乃右のありさなはつく  
世の恨く事さふ位のあまほき

松を道小座のあき事  
甲乃徳別事くむさききて

藤乃柵く事さるあて  
葛代辰のあめとあうさう

松乃草履のあしめ事  
右ぬく事さふ事と撰きて

夕魚のあしめ事さふひらる  
松のあしめ事さふあまなむ

人夢の仲よ何を信やん  
福さく事さふ事さふあうさ

くさく事さふ文つさ返く  
鹿之川さく事さふ事さふ

事さふ事さふ事さふ事さふ  
お提らる事さふ事さふ事さふ

湯の事さふ事さふ事さふ  
板初ら父の一歯のぬりて

ほんたわさく事さふ事さふ  
咲むよか事さふ事さふ事さふ

すさく事さふ事さふ事さふ  
向しの人とけさ事さふ事さふ

いゝととよむ子座のうら  
二町ほく西は石乃うゆき  
板のぬれ豆々く減ふく  
まきさ煙子に持ハ指柿むき、  
小信ふさういかにこまうかれ  
新舞の繪とよまらふほびて  
わづ意ハ色紙とよむるこまう  
文目々活戸まげれらまうり  
まきとまのてまらふまら  
まう有て麻屋ま入條の隈  
佐わりろく暖のうけ美  
文級めまら石とまより

北邊大人口授

從諾天尔波抄 全六冊

七部集句く抄てふはと於終くしてふ波の  
んゆをこくくくはす

文化十酉歲

皇都蕉門書肆

- 中立賣堀川東入
- 浦井徳右衛門
- 寺町二條下ル
- 野田治兵衛
- 寺町姉小路上ル
- 野田嘉助
- 室町一條下ル
- 橘仙堂善兵衛

